

尾ノ上遺跡 桜田遺跡

2019年12月
国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道9号の大田市久手町刺鹿から大田市静間町間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、大田・静間道路を平成24年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成29年度に実施した大田市鳥井町地内に所在する尾ノ上遺跡と平成29年度と平成30年度に実施した同じ大田市鳥井町地内に所在する桜田遺跡の調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では、弥生時代前期の大溝や弥生時代後期の墓、近世の石切場跡などの遺構が見つかりました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

令和元年12月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 鈴木 祥弘

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成 29（2017）年度と平成 30(2018) 年度に実施した一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本報告書で報告する尾ノ上遺跡では、弥生時代の大溝や墓が、桜田遺跡では、横穴墓と近世に遡ると考えられる石切場跡が確認され、弥生時代から近世にいたる遺物が出土しました。

尾ノ上遺跡と桜田遺跡が立地する鳥井丘陵は、かつてはその東に潟湖が広がり、西には静間川の河口部を擁し、南に平野部を控え、北に日本海を望む大田市中心部のランドマークです。そこには、尾ノ上遺跡の存続時期にも重なる弥生時代から古墳時代の大規模な集落・祭祀遺跡として著名な鳥井南遺跡が存在します。尾ノ上遺跡で発見された弥生時代前期の大溝や弥生時時代後期の箱式石棺墓は、これを含む当時の集落の様子を知る上で重要な資料となります。

また、桜田遺跡の石切場跡は、現大田市域沿岸部に広く分布する石切場跡の中で、分布のいわば空白域を埋めるもので注目されます。

本報告書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市、鳥井地区・長久地区の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和元年 12 月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 29 年度から平成 30 年度に実施した一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

平成 29 年度 (2017)	尾ノ上遺跡（大田市鳥井町鳥越 82-2 番地）
平成 29 年度 (2017)	桜田遺跡 1 区（大田市鳥井町鳥井 1171 番地）
平成 30 年度 (2018)	桜田遺跡 2 区（大田市鳥井町鳥井 1128 番地） 整理等作業・報告書作成
令和元年度 (2019)	整理等作業・報告書作成
3. 調査組織

調査主体	島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）
平成 29 年度 (2017)	現地調査
事務局	萩 雅人（所長）、石橋 聰（総務課長）、 池淵俊一（管理課長）
調査担当者	大庭俊次（調査第一課長）、園山 薫（同課嘱託職員）、 内田律雄（同課臨時職員）、米田美江子（同）、坂根健悦（同）
平成 30 年度 (2018)	現地調査
事務局	椿 真治（所長）、石橋 聰（総務課長）
調査担当者	大庭俊次（企画幹）、守岡正司（管理課長）、神柱靖彦（同企画員）、 深田 浩（調査第一課長）
令和元年度 (2019)	報告書作成
事務局	椿 真治（所長）、和田 諭（総務課長）
調査担当者	大庭俊次（企画幹）
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については次の機関に委託した。

平成 29 年度	石見銀山建設 株式会社
平成 30 年度	表土掘削は株式会社 堀工務店、空中写真撮影はエイティック 株式会社
5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順・肩書きは当時）

鳥谷芳雄（島根県立古代出雲歴史博物館主任学芸員）、中村唯史（島根県立三瓶自然館課長補佐）、 野島智実（大田市教育委員会社会教育課主任）、松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘所長）
--
6. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系 X 軸方向を示し、座標系 X Y 座標は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
7. 本書で使用した第 2・3・12 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図（石見大田・大浦）を使用して作成したものである。
8. 本書に掲載する土層名は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財

- 団法人日本色彩研究所 色票監修 に従って表記した。
9. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は大庭が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・添書は、各調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
 10. 本書の執筆は第4章第3節を守岡が行い、それ以外は大庭が行った。
 11. 本書の編集は大庭が行った。
 12. 註は各章ごとに連番を振り、参考文献等とともに各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は、全体の通し番号により表示した。
 13. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）にて保管している。

凡例

1. 本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SK：土坑 SD：溝状遺構 P：柱穴・ピット

2. 本書で用いた土器の分類及び編年観は、主として下記の文献に依拠している。

【弥生土器・土師器】

松本岩雄 1992「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

松本岩雄 1992「石見」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

【須恵器】

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

川原和人 2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

榎原博英 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1. 事業計画の概要	1
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整及び法的手続き	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過	3
1. 発掘作業の概要	3
2. 整理作業の概要	4
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 尾ノ上遺跡の調査成果	9
第1節 尾ノ上遺跡の調査概要	9
1. 発掘調査区の設定	9
2. 調査地区割りの設定	9
3. 調査方法	9
第2節 A区・B区の調査	9
1. 基本層序	9
2. 検出遺構と遺物	12
第3節 まとめ	20
第4章 桜田遺跡の調査成果	23
第1節 桜田遺跡の調査概要	23
1. 発掘調査区の設定	23
2. 調査方法	25
第2節 1区の調査	25
1. 1区の基本層序	25
2. 検出遺構と遺物	25
第3節 2区の調査	35
1. 2区の基本層序	35
2. 検出遺構と遺物	35
第4節 まとめ	40

第5章 総括	42
第1節 尾ノ上遺跡.....	42
1. 大溝	42
2. 箱式石棺墓	42
第2節 桜田遺跡.....	43

挿図目次

第1図 尾ノ上遺跡・桜田遺跡の位置	1
第2図 大田静間道路事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地	2
第3図 尾ノ上遺跡・桜田遺跡の位置と周辺地形	6
第4図 尾ノ上遺跡の調査位置図 (S=1:1,500)	10
第5図 尾ノ上遺跡 グリッド配置図 (S=1:300)	11
第6図 尾ノ上遺跡 全体図 (S=1:250)	13
第7図 尾ノ上遺跡 土層図 (1) (S=1:60)	14
第8図 尾ノ上遺跡 土層図 (2) (S=1:60)	15
第9図 尾ノ上遺跡 箱式石棺墓実測図 (S=1:30)	17
第10図 尾ノ上遺跡 SK01・02 実測図 (S=1:30)・出土遺物実測図 (S=1:3)	18
第11図 尾ノ上遺跡 包含層出土遺物実測図 (S=1:3・S=1:1)	19
第12図 桜田遺跡の位置と周辺地形 (S=1:25,000)	23
第13図 桜田遺跡の調査位置図 (S=1:1,500)	24
第14図 桜田遺跡1区 平面図・立面図 (S=1:400)	27
第15図 桜田遺跡1区 1号穴実測図 (1) (S=1:40)	28
第16図 桜田遺跡1区 1号穴実測図 (2) (S=1:40)	29
第17図 桜田遺跡1区 1号穴閉塞石実測図 (S=1:40)	30
第18図 桜田遺跡1区 石切場実測図 (1) (S=1:100)	31
第19図 桜田遺跡1区 石切場実測図 (2) (S=1:100)	32
第20図 桜田遺跡1区 石切場実測図 (3) (S=1:60)	33
第21図 桜田遺跡1区 石切場 (B-B') 土層図 (S=1:40)	33
第22図 桜田遺跡1区 包含層出土遺物実測図 (S=1:6)	34
第23図 桜田遺跡2区 遺構配置図 (S=1:150)	36
第24図 桜田遺跡2区 SK01 実測図 (S=1:20)	37
第25図 桜田遺跡2区 SK02 実測図 (S=1:40)	38
第26図 桜田遺跡2区 SD02 実測図 (S=1:80)	39
第27図 桜田遺跡2区 包含層出土遺物実測図 (S=1:3)	40

表目次

第1表 尾ノ上遺跡 出土遺物観察表	22
第2表 桜田遺跡 出土遺物観察表	41

写真目次

- | | | | |
|-------|--|----------------------|---|
| 図版 1 | 1. 尾ノ上遺跡（手前）と御堂谷遺跡
(奥) 空撮（東から） | 図版 12 | 1. 桜田遺跡 1区 調査前(北東から)
2. 桜田遺跡 1区 完掘状況 空撮 |
| | 2. 尾ノ上遺跡 調査区全景 空撮
(東から) | 図版 13 | 1. 桜田遺跡 1区 石切場と1号穴
(東から) |
| 図版 2 | 1. 尾ノ上遺跡 調査前風景全景
(南から) | | 2. 桜田遺跡 1区 1号穴（東から） |
| | 2. 尾ノ上遺跡 A区 全景（南東から） | 図版 14 | 1. 桜田遺跡 1区 1号穴前部
2. 桜田遺跡 1区 1号穴（東から） |
| 図版 3 | 1. 尾ノ上遺跡 A区 箱式石棺位置
(南東から) | 図版 15 | 1. 桜田遺跡 1区 1号穴
(玄門部から奥)
2. 桜田遺跡 1区 1号穴（内部） |
| | 2. 尾ノ上遺跡 A区 箱式石棺小口
(西から) | 図版 16 | 1. 桜田遺跡 1区 1号穴加工痕
(向かって左側壁)
2. 桜田遺跡 1区 石切場
(1号穴より北側 東から) |
| 図版 4 | 1. 尾ノ上遺跡 A区 箱式石棺内部
2. 尾ノ上遺跡 A区 箱式石棺と
SK02 検出状況（東から） | 図版 17 | 1. 桜田遺跡 1区 石切場南寄り
(東から)
2. 桜田遺跡 1区 石切場中央部 |
| 図版 5 | 1. 尾ノ上遺跡 A区 箱式石棺と
SK02 検出状況（南から）
2. 尾ノ上遺跡 A区 SK01 検出状況 | 図版 18 | 1. 桜田遺跡 1区 石切場部分(東から)
2. 桜田遺跡 1区 石切場南半分全景 |
| 図版 6 | 1. 尾ノ上遺跡 A区 SK02 検出状況
2. 尾ノ上遺跡 B区 全景（北西から） | 図版 19 | 1. 桜田遺跡 2区 全景 空撮
(南から日本海を望む)
2. 桜田遺跡 2区 完掘状況 空撮 |
| 図版 7 | 1. 尾ノ上遺跡 B区 大溝内石検出
状況（東から）
2. 尾ノ上遺跡 B区 大溝掘削状況
(西から) | 図版 20 | 1. 桜田遺跡 2区 完掘状況(西から)
2. 桜田遺跡 2区 完掘状況(北から) |
| 図版 8 | 1. 尾ノ上遺跡 B区 大溝掘削状況
(南から)
2. 尾ノ上遺跡 B区 大溝土層堆積
状況（西から） | 図版 21 | 1. 桜田遺跡 2区 SK01 完掘状況 |
| 図版 9 | 尾ノ上遺跡 包含層出土遺物 (1) | | (西から) |
| 図版 10 | 尾ノ上遺跡 包含層出土遺物 (2) | 2. 桜田遺跡 2区 SK02 完掘状況 | |
| 図版 11 | 尾ノ上遺跡 包含層出土遺物 (3)
尾ノ上遺跡 SK01 出土遺物 | 図版 22 | 桜田遺跡 出土遺物 |

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 事業計画の概要

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ主要幹線道路である。このうち、島根県大田市周辺では急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が多発しやすい状況にある。通行止め時には大幅な迂回が必要となるなど、日常生活及び経済活動に必要な交通機能が損なわれ、主要幹線道路としての機能に支障をきたしているところであった。こうした状況のもと、交通混雑の緩和及び災害時の緊急連絡道路を確保するために、大田市久手町から大田市静間町に至る延長5.0kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成24年度から「大田・静間道路」として事業着手されている。

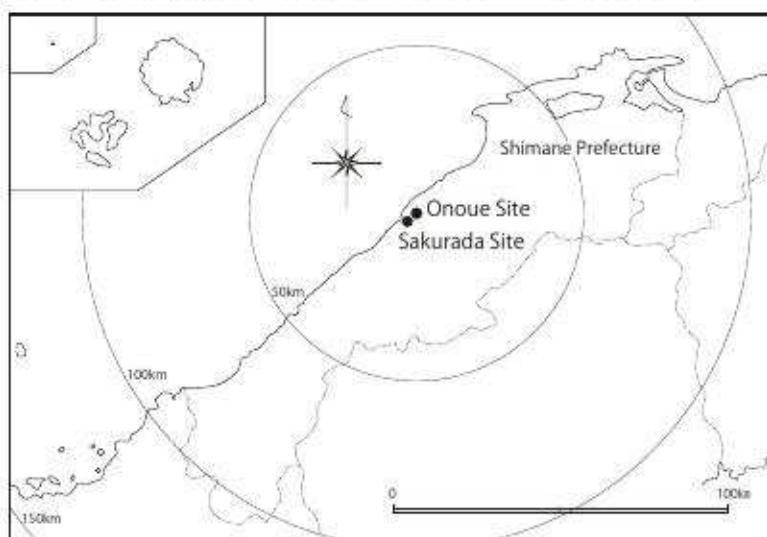
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整及び法的手続き

この計画・事業化にあたり、平成25年2月8日付け国中整松調設第106号及び平成26年2月19日付け国中整松調設第94号で国土交通省から島根県教育委員会に対して事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受け島根県教育委員会は大田市教育委員会の協力の下、2度の分布調査を実施した結果、6箇所の遺跡と尾ノ上遺跡を含む39箇所の要注意箇所を確認し、平成26年5月13日付け島教文財第159号で国土交通省に回答した。

これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で適宜協議が行われ、事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な検討を行ってきた。事業の早期推進と調査体制を強化するため、島根県教育委員会は大田市教育委員会と協議を行い、大田市が国道9号の交通状況改善のため早期の開通を働きかけてきた地元自治体として調査に協力することになった。それを受け、大田市教育委員会は平成26年度に4箇所の試掘確認調査を実施した後、栗林B遺跡及び鯛渕遺跡の発掘調査を実施して、すでに報告書が刊行されている。

平成27年度から調査は本格化し、島根県教育委員会は22箇所の試掘確認調査を行って、7箇所の遺跡を確認した。このうち、尾ノ上遺跡の試掘調査は平成27年5月～6月に実施した。

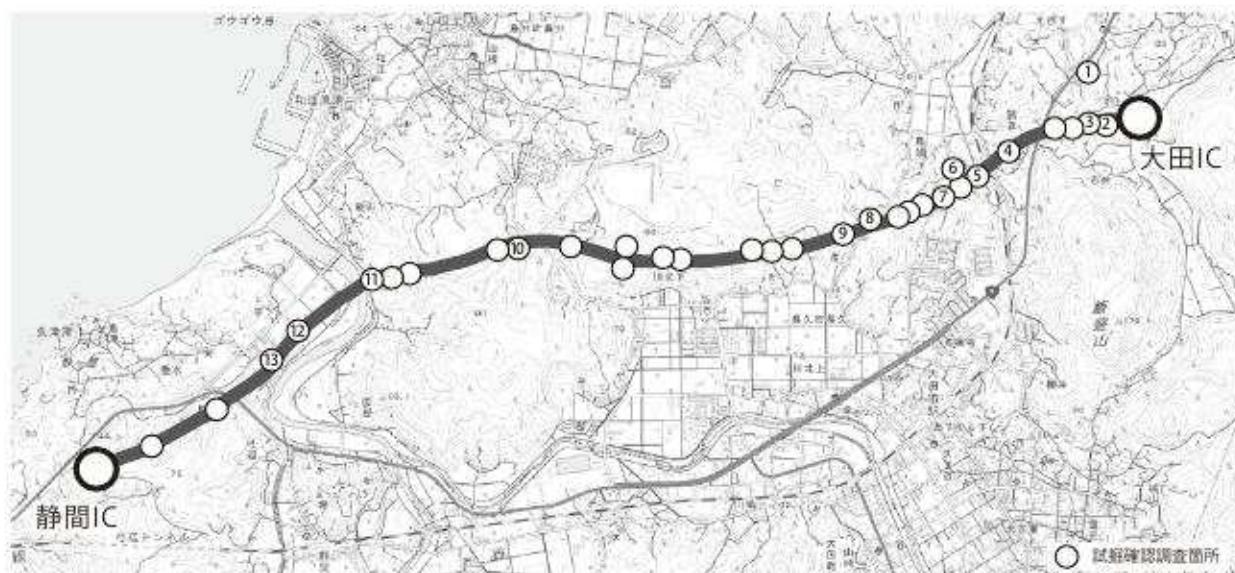
尾ノ上遺跡は、この試掘調査の結果に基づき、平成29年5月22日付け国中整松工第36号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省松江国道事務所長から島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対して平成29年6月12日付け島教文財第49号の19で島根県教育委員会教育長から記録保存のための発掘調査の実施



第1図 尾ノ上遺跡・桜田遺跡の位置

が勧告された。尾ノ上遺跡は、埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は、平成29年5月8日付け島教埋第98号により埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。現地調査終了後は、平成30年3月30日付け島教文財第192号の20により、島根県教育委員会教育長から国土交通省松江国道事務所長あてに終了報告を提出した。

桜田遺跡は、平成25・26年度に実施した分布調査で「要注意箇所」として回答し、平成28年7月に試掘確認調査を実施したところ横穴墓を確認した。この結果を受け、平成29年5月22日付け国中整松工第38号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省松江国道事務所長から島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対して平成29年6月12日付け島教文財第49号の21で島根県教育委員会教育長から記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は平成29年12月1日付け島教埋第441号により島根県埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。現地調査終



No.	遺跡名	所在地	種別	調査
①	諸友大師山横穴IV群1号穴	大田市久手町	横穴墓	平成29年度
②	奥市井遺跡	大田市久手町	集落跡	平成28年度(大田市教育委員会)
③	諸友越峠遺跡	大田市久手町	集落跡	平成28年度(大田市教育委員会)
④	諸友西横穴墓群	大田市久手町	横穴墓	(平成29年度試掘確認調査)
⑤	栗林B遺跡	大田市久手町	散布地	平成27年度(大田市教育委員会)
⑥	栗林C遺跡	大田市久手町		(平成26年度試掘確認調査)
⑦	栗林A遺跡	大田市久手町		(平成26年度試掘確認調査)
⑧	尾ノ上遺跡	大田市鳥井町	集落跡	平成29年度
⑨	御堂谷遺跡	大田市鳥井町・長久町	集落跡	平成29年度
⑩	桜田遺跡	大田市長久町	横穴墓	平成29・30年度
⑪	鯛渕遺跡	大田市静間町	集落跡	平成27年度(大田市教育委員会)
⑫	平ノ前遺跡	大田市静間町	集落跡	平成28・29年度
⑬	静間城跡	大田市静間町	城跡	平成28年度

第2図 大田静間道路事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

了後は、平成 30 年 3 月 30 日付け島教文財第 192 号の 20 により、島根県教育委員会教育長から国土交通省松江国道事務所長あてに終了報告を提出した。

平成 29 年度の調査では、近世以降の石切場跡が凝灰岩の岩盤に沿って 60m 以上検出されたが、対岸の丘陵斜面（2 区）にも石切の対象とされた同様の岩盤が存在することがわかった。また、須恵器、土師器を確認したため、当該道路事業を所管する国土交通省と協議して国庫補助事業による試掘確認調査を平成 30 年 6 月 20 日～6 月 25 日に実施した。その結果、岩盤から方形土坑や溝状遺構を確認したことにより、この部分を桜田遺跡 2 区として本調査を実施することとなった。桜田遺跡 2 区の文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による通知は、平成 30 年 7 月 2 日付け島教埋第 167 号で埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。現地終了後は平成 30 年 7 月 27 日付け島教文第 410 号により、島根県教育委員会教育長から国土交通省松江国道事務所長あてに終了報告を提出した。

第 2 節 発掘作業と整理作業の経過

1. 発掘作業の概要

尾ノ上遺跡

発掘調査は平成 29 年 7 月 7 日から平成 29 年 11 月 24 日まで実施した。調査区は、西から A 区と B 区を設定した。調査 A 区・B 区を併せた調査面積は、約 556m²である。植林されていた樹木の伐採および搬出後、A 区から表土掘削を行い、包含層掘削を行いながら遺構検出に努めた。A 区で箱式石棺墓、A・B 区にわたる大溝を確認し、遺構について半裁、写真撮影、実測を行った。

発掘調査は 11 月 24 日に終了し、国土交通省へ現地を引き渡した。調査中、平成 29 年 9 月 20 日に島根県立八雲立つ風土記の丘所長松本岩雄氏、12 月 6 日に三瓶自然館課長補佐中村唯史氏より遺跡の時期や性格、地質上の特徴などについての調査指導を受けた。10 月 28 日には御堂谷遺跡の現地説明会（参加者約 60 名）に併せて現地公開を行った。また、大田市教育委員会の大國晴雄氏、遠藤浩巳氏、中田健一氏、西尾克己氏、野島智実氏、島根大学法文学部大橋泰夫氏の現地視察を受けた。

桜田遺跡

1 区

平成 29 年度の発掘作業は平成 29 年 12 月 13 日～平成 30 年 2 月 14 日にかけて実施した。12 月 13 日、重機により南側から表土掘削を開始し、表土掘削が終了した箇所から遺構検出、遺構掘削を行った。調査の結果、時期不明の横穴墓 1 基と近世以降のものと思われる石切場を確認し、遺構について写真撮影、実測、写真測量を行った。1 月 29 日には全体の遺構検出、清掃、写真撮影、空中写真撮影を行い、全ての調査を終了した。調査面積は 871m²である。

2 区

平成 30 年度の調査は、発掘作業は平成 30 年 7 月 9 日～7 月 20 日にかけて実施した。重機により南側から表土掘削を開始し、表土掘削が終了した箇所から遺構検出、遺構掘削を行った。7

月11日には土坑を確認し、遺構について半裁、写真撮影、実測を行った。7月20日には全体の遺構検出、写真撮影、空中写真撮影を行い、全ての調査を終了した。調査面積は172m²。調査中、7月13日に、石の切り出し方法等について古代出雲歴史博物館鳥谷芳雄主任学芸員に、7月18日に大田市周辺の類例について大田市教育委員会社会教育課野島智実主任に調査指導を受けた。

2. 整理作業の概要

遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、続いて復元・実測等の整理作業を行った。平成30年度から令和元年度にかけては、現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類について、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真撮影、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

本書で報告する尾ノ上遺跡と桜田遺跡が所在する島根県大田市は、東西に長い県のほぼ中央に位置し、南には国立公園三瓶山や大江高山の火山群があり、北は日本海に面している。三瓶山と大江高山火山群の間を流れて日本海に注ぐ三瓶川や静間川の河口に沖積平野が認められ、海岸部には砂丘が発達している。

尾ノ上遺跡は、大田市鳥井町・長久町にまたがる鳥井丘陵東部の丘陵裾（標高約30m）に位置しており、同一丘陵の西方山腹には弥生時代～古墳時代の集落跡が検出された御堂谷遺跡が立地する（第3・4図）。桜田遺跡は、鳥井丘陵西側の北に向かって開ける谷間（標高約20m）に立地しており、丘陵を南北に縦貫する街道沿いに面している。

鳥井丘陵の東方には、1951（昭和26）年の干拓で完全に消滅するまで波根湖（潟湖）が存在した。鳥井丘陵は、北側の日本海や西側の静間川河口部、そして東側は波根湖に由来する低湿地に囲まれた独立丘陵として存在するような景観であった。なお、鳥井丘陵の北側には波根湖の北辺に沿って近世山陰道が通過していたが、推定古代山陰道はこの近世山陰道にほぼ重なるルートと、波根湖南辺の丘陵裾を通過するルートも考えられている。この二つの推定古代山陰道ルートに挟まれた鳥井丘陵の東端には、「鳥越」地名を示唆するかのような丘陵を南北・東西に縦横断する複数の峠道も存在している。

第2節 歴史的環境

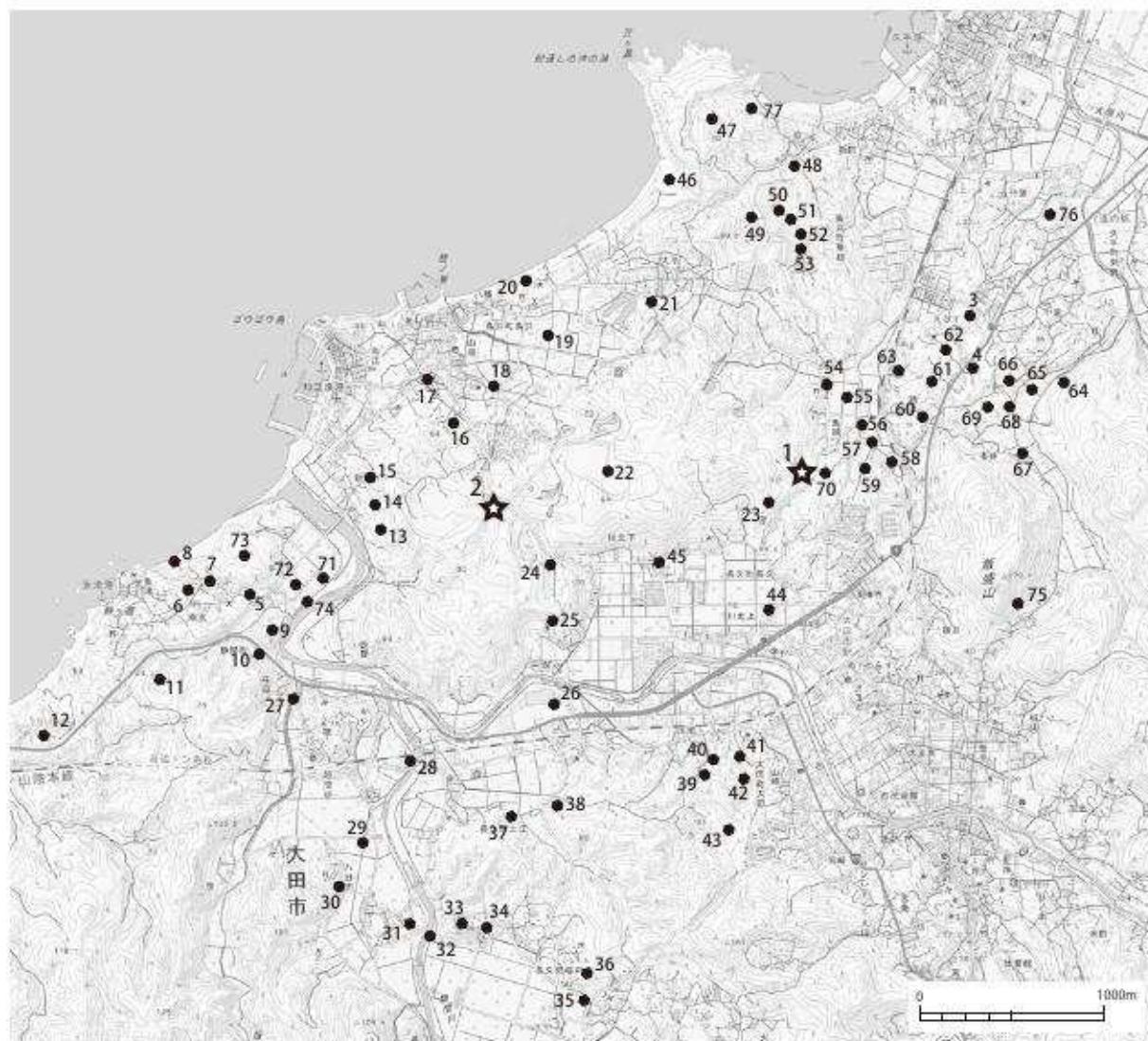
旧石器・縄文時代

大田市域では旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていないが、平成26年度に発掘調査が行われた中尾H遺跡4区（65）では、縄文時代早期から草創期に遡る可能性のある尖頭器が出土している。今まで大田市域は三瓶山の厚い火山灰層に覆われているため旧石器時代の遺跡を検出することは困難だと考えられてきた中で、今後、資料の増加が期待される事例といえる。

縄文時代の遺跡もまだ少ないものの、近年の調査量増加に伴い遺跡の発見も急増している。中尾H遺跡では上記の尖頭器の他に多量の縄文土器も確認されており、後期を中心とするが、前期・中期に遡る土器も含まれていた。この他に線刻によって絵を描いたとみられる石器や、大型石棒なども認められ、当時の精神世界を垣間見ることができる資料として注目される。

弥生時代

弥生時代になると遺跡は増加する傾向にある。静間川下流域の平野部には前期の土器が見つかった土江遺跡（28）や八日市遺跡（32）などが存在している。平成28年度に発掘調査が行われた栗林B遺跡（58）では前期の河道2本が検出され、河道内から環状杭列が確認されていることから、周辺に集落が営まれていたことが想定されている。平成29年度に発掘調査が行われた御堂谷遺跡（23）では、弥生時代前期の明確な遺構は検出されていないが、標高約53mの谷状地形の包含層から弥生時代前期後葉の土器が多数出土しており、付近に当該期の高地性集落が存在していた可能



- 1. 尾ノ上遺跡
- 2. 桜田遺跡
- 3. 諸友大師山横穴Ⅰ～Ⅲ群
- 4. 諸友大師山横穴Ⅳ群 1号穴
- 5. 平遺跡
- 6. 垂水古墳
- 7. 近藤平遺跡
- 8. 近藤浜横穴
- 9. 柿田立目後横穴群
- 10. 竹下忠紀宅後横穴
- 11. 垂水遺跡
- 12. 済東遺跡
- 13. 銅渦遺跡
- 14. 静間鉢
- 15. 渡瀬遺跡
- 16. 西鳥井遺跡
- 17. 山根遺跡
- 18. 上山根遺跡
- 19. 北沢遺跡
- 20. 伝地山古墳
- 21. 大平横穴群
- 22. 鳥井南遺跡
- 23. 御堂谷遺跡
- 24. 鳥井西遺跡
- 25. 浄土寺遺跡
- 26. 八石遺跡
- 27. 笹川遺跡
- 28. 土江遺跡
- 29. 八日市鉢
- 30. 八日市横穴群
- 31. 第二八日市横穴群
- 32. 八日市遺跡
- 33. 稲用城
- 34. 稲用下遺跡
- 35. 大迫横穴
- 36. 延里遺跡
- 37. 天主山横穴
- 38. 大道横穴
- 39. 宮の奥遺跡
- 40. 宮の奥横穴群
- 41. 鶴山遺跡
- 42. 亀山横穴
- 43. 貝殻城跡
- 44. 中島遺跡
- 45. 野井神社遺跡
- 46. 大平A遺跡
- 47. 石弩城跡
- 48. 追A遺跡
- 49. 追B遺跡
- 50. 追山田西横穴群
- 51. 山田横穴群
- 52. 追横穴群
- 53. 追C遺跡
- 54. 鳥越B遺跡
- 55. 中祖遺跡
- 56. 鳥越C遺跡
- 57. 栗林C遺跡
- 58. 栗林B遺跡
- 59. 栗林A遺跡
- 60. 諸友西横穴群
- 61. 山田庫夫宅裏横穴群
- 62. 二中横穴群
- 63. 鳥越A遺跡
- 64. 市井深田遺跡
- 65. 中尾H遺跡
- 66. 中尾横穴
- 67. 市井遺跡
- 68. 奥市井遺跡
- 69. 諸友越峠遺跡
- 70. 諸友西ヶ迫遺跡
- 71. 平ノ前遺跡
- 72. 網引原遺跡
- 73. 平山横穴
- 74. 静間城跡
- 75. 城山古墳
- 76. 竹原古墳
- 77. 百濟鉢

第3図 尾ノ上遺跡・桜田遺跡の位置と周辺地形

性がある。中期になると鶴山遺跡(41)で土器が確認され、鳥井南遺跡(22)では弥生時代中期から古墳時代後期にかけての大規模な集落跡が発見されている。弥生時代の遺構には、焼失建物が含まれているほか、塩町式土器が複数出土していることから、備後北部との交流が推測される。また、後期の竪穴建物からは鉄製鋤先とともに多量の土器も出土している。御堂谷遺跡では中期末葉及び後期前半の竪穴建物や加工段が複数検出されており、うち6号竪穴建物からは県内最古級のガラス小玉が出土しており注目される。平成28年度に発掘調査を実施した平ノ前遺跡(71)は弥生時代から古代の集落遺跡であることが判明した。弥生時代の水路跡2条が検出されており、中期後葉から後期前葉には静間川からの導水施設が構築されていた。以上のように静間川周辺地域では弥生時代の遺跡が多く確認されており、遺跡の集中する地域といえる。

古墳時代

古墳時代の集落跡としては、御堂谷遺跡、市井深田遺跡(64)、鳥井南遺跡、平ノ前遺跡などが知られている。丘陵部に営まれた遺跡としては、御堂谷遺跡、市井深田遺跡、鳥井南遺跡などがあり、御堂谷遺跡では古墳時代中期前葉の竪穴建物や加工段が複数検出され、うち1号竪穴建物からは土製勾玉が出土する。市井深田遺跡は古墳時代後期から古代の集落跡で、竪穴建物や掘立柱建物を建てた加工段が多数見つかっている。鳥井南遺跡では人形や武器形、鏡、玉などの祭祀に関する土製模造品が出土していることが注目される。平野部に位置する平ノ前遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての竪穴建物の他に中期から後期頃の灌漑用水路跡が確認されている。水路内からは多量の土器とともに金銅製歩搖付空玉1点が発見された。この空玉は朝鮮半島製もしくは国内で製作された可能性が考えられ、当時の朝鮮半島との交流を窺い知ることのできる貴重な資料といえる。

また、古墳時代の大田市域は、石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯として知られている。特に多く分布しているのは波根湖周辺の丘陵部であるが、海に面した静間町でも平山横穴(73)や近藤浜横穴(8)、柿田立目後横穴群(9)などが存在している。一方、古墳時代前期～中期と考えられる古墳としては、竹原古墳(76)や垂水古墳(6)が波根湖や静間川河口部に築造されるが、詳細は不明である。また、後期古墳としては、大田市域では大型の横穴式石室をもつ行恒古墳(大田市久利町)や城山古墳(75)が注目されるほか、鳥井南遺跡でも規模は小さいものの、横穴式石室を有する古墳が2基確認されている。

古代

古代になると御堂谷遺跡、平ノ前遺跡、市井深田遺跡の他に鯛渕遺跡(13)などが知られるようになる。御堂谷遺跡では、丘陵上の谷状地形の中央部から門の可能性のある掘立柱建物1棟と複数の柵列が検出されている。周辺からは灯明皿形土器や須恵器蓋環等の転用硯、鉄鉢形土器など特殊な遺物が出土しており、付近に山林寺院等の仏教関連施設の存在が示唆され注目される。平ノ前遺跡では3間×6間の規模をもつ大型の掘立柱建物や漆付着土器や墨書き土器なども確認されており、上述した古墳時代と併せて古代においても静間川下流域で重要な位置を占めていたものと推測される。鯛渕遺跡は平ノ前遺跡同様、静間川下流域に所在しており、柱穴群や溝などが確認されている。遺物には「司」の刻書、「郡」や「佛」等が記された墨書き土器や土馬、漆付着土器など、官衙的な特色をもつ土器も含まれていた。その立地から古代の交通や河川管理上に必要な地方官衙的な役割を担っていた可能性が高いと考えられており、静間川対岸に位置する平ノ前遺跡と併せて静間川下流域の古代の様相が解明されることが期待される。市井深田遺跡では海岸部では類例の少ない造り

付け竈を持つ竪穴建物も発見されており、古代における山間部と海岸部の交流を窺い知ることができる資料といえる。また、中尾H遺跡（1・2区）からは「二斗一升二合」「石口」と読める木簡が出土しており、海産物のカメノテを貢献する際の荷札木簡と推定されている。さらに、神谷遺跡（大田市久手町）では横口付炭窯が確認されていることから、鍛冶・製鉄関連の遺跡が近在する可能性が示唆される。この他に円面硯や平安時代初期の須恵器が出土した八石遺跡（26）など、大田市域に官衙に関連する遺跡が多数存在することは注目されよう。

中世・近世

戦国期になって石見銀山の開発が本格化されると、銀山の支配を巡って大内氏と尼子氏が争うことになり、大田市東部では各所に稻用城（33）等の山城や砦が築かれた。また、近年、静間川沿いの小丘陵に居館を兼ねた静間城跡（74）の調査によって、15世紀後葉から16世紀前葉に交通の要所を支配する領主層の様相が明らかとなっている。

近世に入ると、静間川河口では前原家による静間鉢（和江鉢）（14）や、石田家による百濟鉢（77）の操業が開始され、明治20年代まで稼業されている。静間鉢の現地には金山彦を祀った祠の跡が残り、周辺の家々では石垣などに鉄滓や炉壁の破片が転用されている様子が窺える。また、元禄年間には、前原家の前原源三郎が静間川の流路を現在の河口の位置に付け替え、新田開発を促したと伝えられる。その他、大田市周辺では大西大師山遺跡（大田市久手町）や大迫ツリ遺跡（大田市温泉津町）などで凝灰岩を採掘する石切場が見つかっており、福光石に代表される石見地域の石材産業の一端を窺い知ることができる。

【参考文献】

- 角川書店 1991『角川日本地名大辞典 32 島根県』
- 大田市教育委員会 2016『栗林B遺跡』
- 大田市教育委員会 2017『鰐淵遺跡』
- 大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ－狼段原地区－』
- 島根県教育委員会 1997『島根県中近世城館分布調査報告書（第1集）石見の城館』
- 島根県教育委員会 2013『門遺跡・高原遺跡I区・中尾H遺跡』
- 島根県教育委員会 2014『市井深田遺跡・荒横遺・鈴見B遺跡I区』
- 島根県教育委員会 2014『庵寺古墳群II 大迫ツリ遺跡 小釜野遺跡』
- 島根県教育委員会 2016『大西大師山遺跡』
- 島根県教育委員会 2016『城ヶ谷遺跡（1区）・神谷遺跡・涼見E遺跡』
- 島根県教育委員会 2017『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』
- 島根県教育委員会 2017『鈴見B遺跡（3区）』
- 島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴IV群1号穴』

第3章 尾ノ上遺跡の調査成果

第1節 尾ノ上遺跡の調査概要

1. 発掘調査区の設定

尾ノ上遺跡は、大田市鳥井町鳥越に所在し、大田市北部の鳥井丘陵東側の麓近くにあって、標高25～30mに立地する。弥生時代～古墳時代の集落跡が確認された御堂谷遺跡の東100m、比高差にして約20m下に位置する遺跡である（第4図）。

尾ノ上遺跡の北西には農業用水の水源となる溜池があり、これを管理する水利組合と協議し、A区とB区の間にある溜池から発する水路とこれに並行する管理道については、これらの機能を損なうことなく、また、管理担当者の隨時安全通行を確保するため、十分な間隔を保持することを取り決めた。これにより、平成27年度の試掘確認調査の結果を受けて設定された尾ノ上遺跡の本調査対象範囲において、用水路と管理道を挟んだ西側をA区、東側をB区として調査区を設定した。調査面積は約556m²（A区230m²、B区326m²）である。

2. 調査地区割りの設定

調査にあたり、調査区の北西を基準に10m四方のグリッドを設定した。北に向けてアラビア数字順、東に向けアルファベット順に呼称した。それぞれの区画は各交点の北西端をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はグリッドで取り上げを行った（第5図）。

3. 調査方法

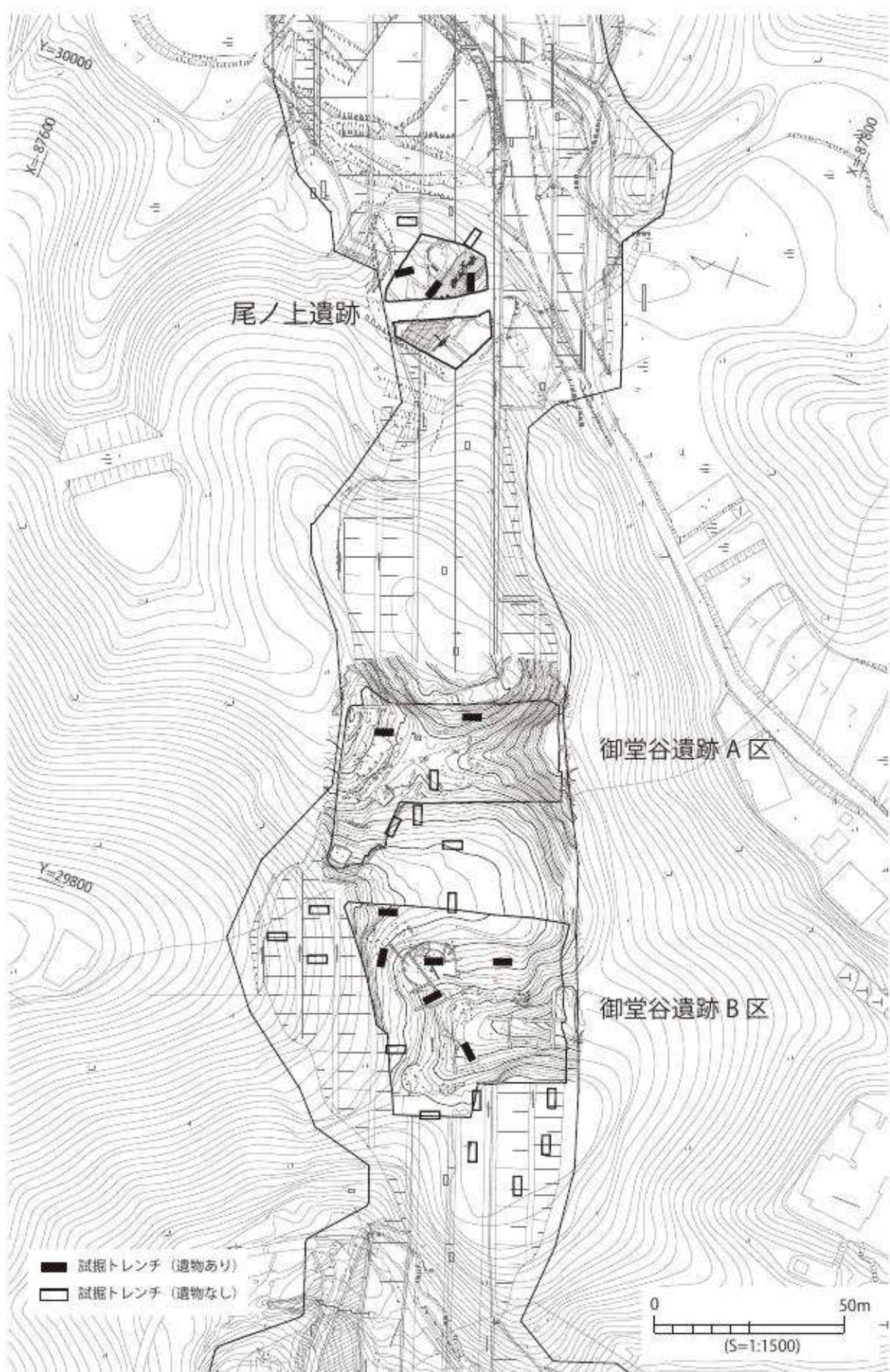
畑作あるいは針葉樹の植林がなされていた本調査対象区域において、伐採整理を終え、起工測量を実施した後、重機による表土掘削を実施した。表土を除去した後の地形は若干のくぼみを持つ段状を呈していた。表土下の包含層を掘り下げる段階で、地山の切り崩し、削平、埋め立てなどによって原地形が4段に及ぶ加工段状に改変されている様子が明らかとなった。このような複雑な地形に加え、調査区の中央は東西方向に幅約9m、長さ約30mにわたる谷状の落ち込みをなしていた。掘り下げにあたっては層位ごとに包含層掘削、遺構検出を実施した。この間、必要な写真撮影、実測、測量などの記録作業を行い、調査区全体の空中写真撮影と調査区内の平面測量を実施した。この後、検出した大溝の下層や地山の様相を確認するため、A区において壁面に沿ったトレーニングを掘削し、写真や図面の記録を取って調査を終了した。

第2節 A区・B区の調査

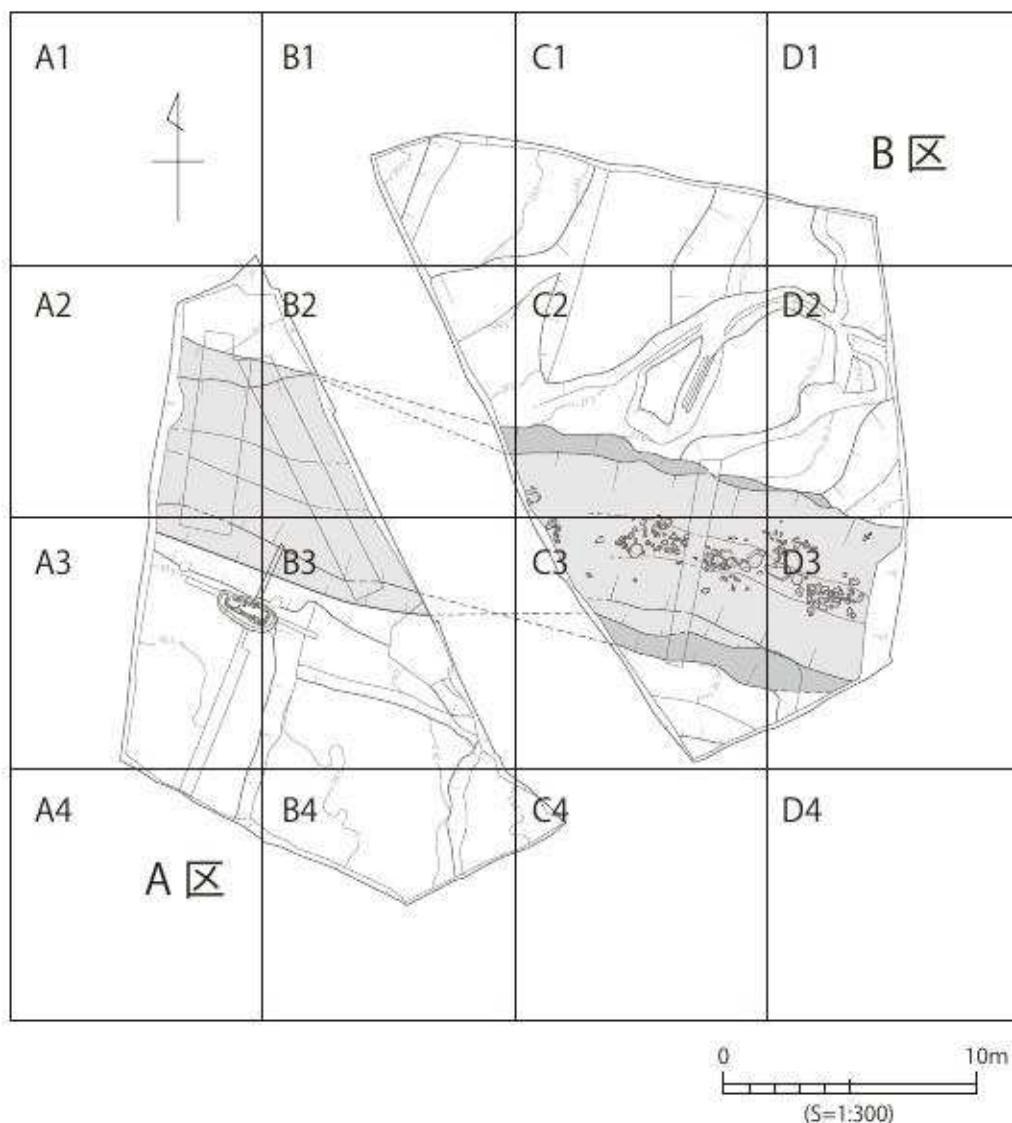
1. 基本層序（第7・8図）

遺跡の基盤層をなすにぶい黄褐色土は、約7万年前の三瓶山の火山噴出物の堆積層である⁽¹⁾。検出された段状地形から谷状の落ち込みには、弥生時代～中世の遺物包含層が堆積する。

表土下第3層までは、近年の畑作あるいは植林に関わる人為的あるいは自然作用による土層堆積である。調査区内にみられる段状地形はこの造成によってできたものと考えられる（第7図上・中段）。第4から第5層は中世にかけて形成されたとみられる。第6層からは回転糸切り痕を残す須恵器壺が出土していることから、第6層から第7層は古代の堆積と思われる。第7層については、



第4図 尾ノ上遺跡の調査位置図 (S=1:1,500)



第5図 尾ノ上遺跡 グリッド配置図 (S=1:300)

地山と同系色の色調を呈しており、その上端が比較的平坦なことから整地されて利用された可能性が考えられる。第7層からは遺物がほとんど出土していないが、この整地により埋め立てられた第8層は、後述する箱式石棺墓や、2基の土坑を覆う土である。第9層以下は大溝の堆積土である。第9層から第10層にかけては、弥生時代後期の遺物が出土することから、箱式石棺墓が構築されるまでに、上流からの土砂により短期間で堆積した可能性が考えられる⁽²⁾。また、第10層にはB区の土層断面に人為的な掘り返しと思われる擾乱が観察され(第8図大溝A)、底面には多量の安山岩、デイサイト、流紋岩などの自然石が落ち込んでいる。第11層及び第12層の堆積は、自然の堆積作用によるものと思われる。第11層からは弥生時代前期後葉の甕あるいは壺の底部が出土している。

以上のように、第1層から第3層は近現代の堆積や土地利用、第4層から第5層は中世の堆積、第6層から第7層は古代の堆積で、第7層は整地層と考えられる。第8層は箱式石棺墓を覆う弥生時代後葉以降の堆積、第9層から第10層は弥生時代後期以前の堆積、第11層及び第12層は弥生時代前期後葉以降に堆積した可能性が考えられる。

2. 検出遺構と遺物（第6図）

調査の結果、A区からB区にかけてみられる大溝と、A区において箱式石棺墓1基、土坑2基を検出した。

大溝（第6・8図）

調査区の中央部、A区からB区にかけての基盤層上で検出した。周辺の地形観察から、元々は調査区の中を西から東に向かって下る谷状地形が存在していたものと思われる。大溝は遺跡の立地する丘陵緩斜面の標高30mから裾部の標高25mまで直線状に延びる。規模は最大幅約8mで、東西方向に約30m確認され調査区外へ続く。断面形は上流にあたるA区では浅い鉢状を呈し、下流のB区では逆台形となり、調査区の東端ではV字状を呈している。深さは0.9mから最深部で1.8mを測り、第9層から第12層までの堆積を確認した。

埋土のうち、下層部の第11層及び第12層の堆積は自然の堆積作用によるものと思われる。第11層からは弥生時代前期後葉の土器底部（第11図5）が出土していることから、この時期から溝として機能していたことがうかがえる（大溝B）。出土遺物はわずかで、流れ込み堆積したものと思われる。第10層の底面から第12層にかけては、多量の安山岩、ディサイト、流紋岩などの自然石が落ち込んでいた。なかには一抱え程ある石もあって、それ以下を掘り下げることができず、B区では溝底の検出に至っていない。第10層は第11層・第12層を掘り返した後の堆積である（第8図）。B区F-F'土層断面で観察される「W」字状の堆積は掘り直しによってできたものと考えられるが、明確な境界は追えなかった（第8図中破線部分）。しかし、A区E-E'土層断面で第10-3層を第10-1層が切る状況が観察されることから、南側に掘り直されことが推察される。この第10層は地山土によく似たにぶい黄褐色土で、遺構周辺の土砂が一気に多量に流入して堆積したものと推測される⁽³⁾。これらの堆積過程が自然によるものか人為的な造成なのかは不明であるが、第10層からは弥生時代後期中葉の土器（第11図6）が出土しており、堆積の時期を示すものと考えられる（大溝A）。この段階の溝幅は6～8mと推定される。

この後、大溝は周辺より低い窪地状の谷間となり、絶えず水が湧きやすい、あるいは水の道となつたことが推測される。第9層の黒褐色土の堆積で大溝はほぼ埋没し、第8層の黒色土がその上を覆う状況である。基本層序の項でも述べたように、古代には大溝内の整地により、地山とほぼ同レベルまで土地利用がなされるようになったものと思われる。

大溝出土遺物（第11図5・6・21）

第11図5は第11層から出土した弥生時代前期後葉の甕の底部である。6は第10層から出土した甕の口縁部で、直立した二重口縁外周に擬凹線文を巡らす。弥生時代後期中葉（V-2）と思われる。21は石匙で、第11層から出土した。これらの遺物のうち、6は大溝Aから、5と21は大溝Bから出土したものである。

箱式石棺墓（第9図）

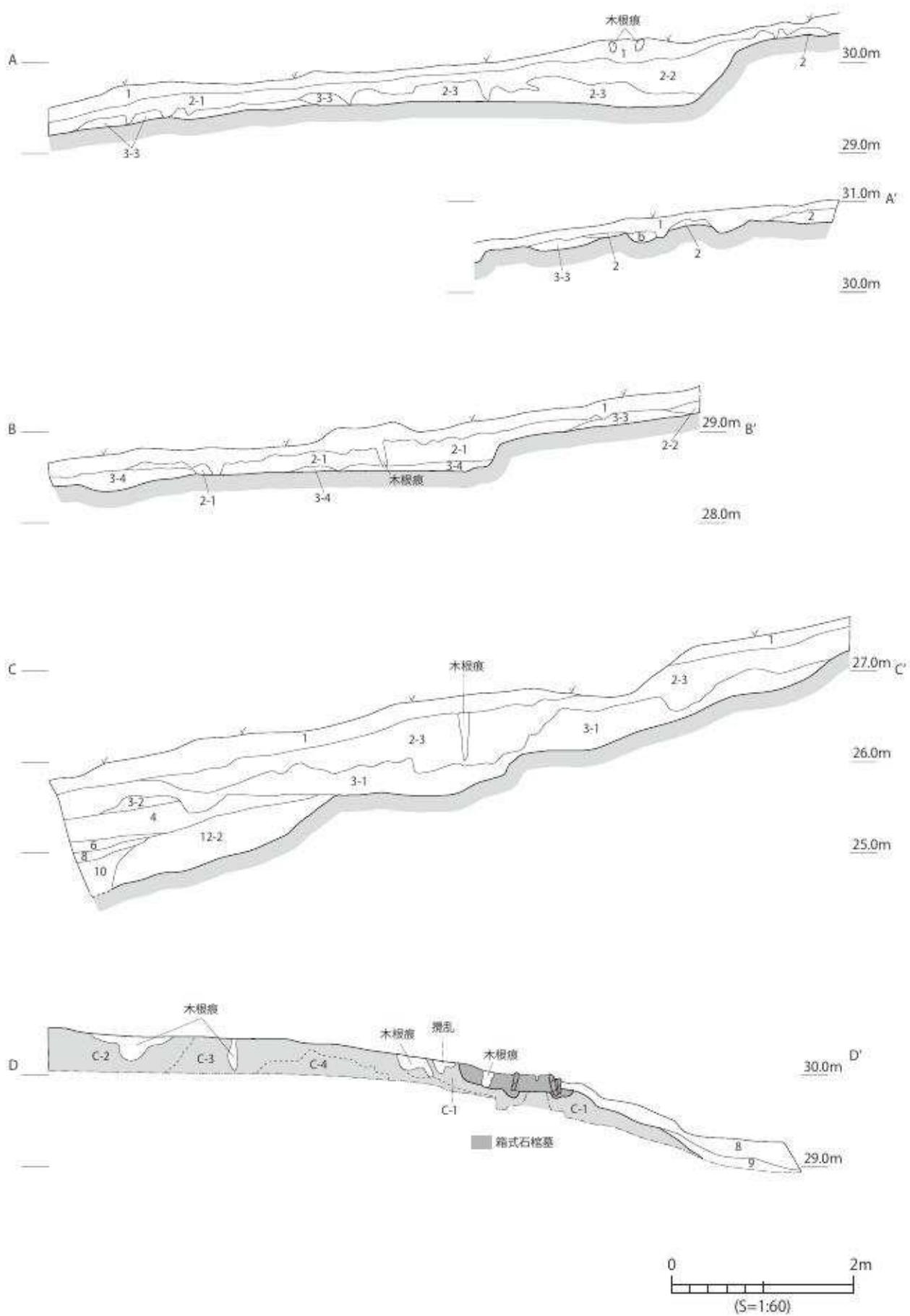
A区の大溝の南肩際、標高30mにおいて、箱式石棺墓を検出した。検出時の状況については、古代以降の包含層を掘削した当初、石棺の側石を検出したものの、木の根などの攪乱等により墓壙の確認には至らなかった。検出した石棺の主軸と直行する軸上にサブトレーンチを設定し、土層断面



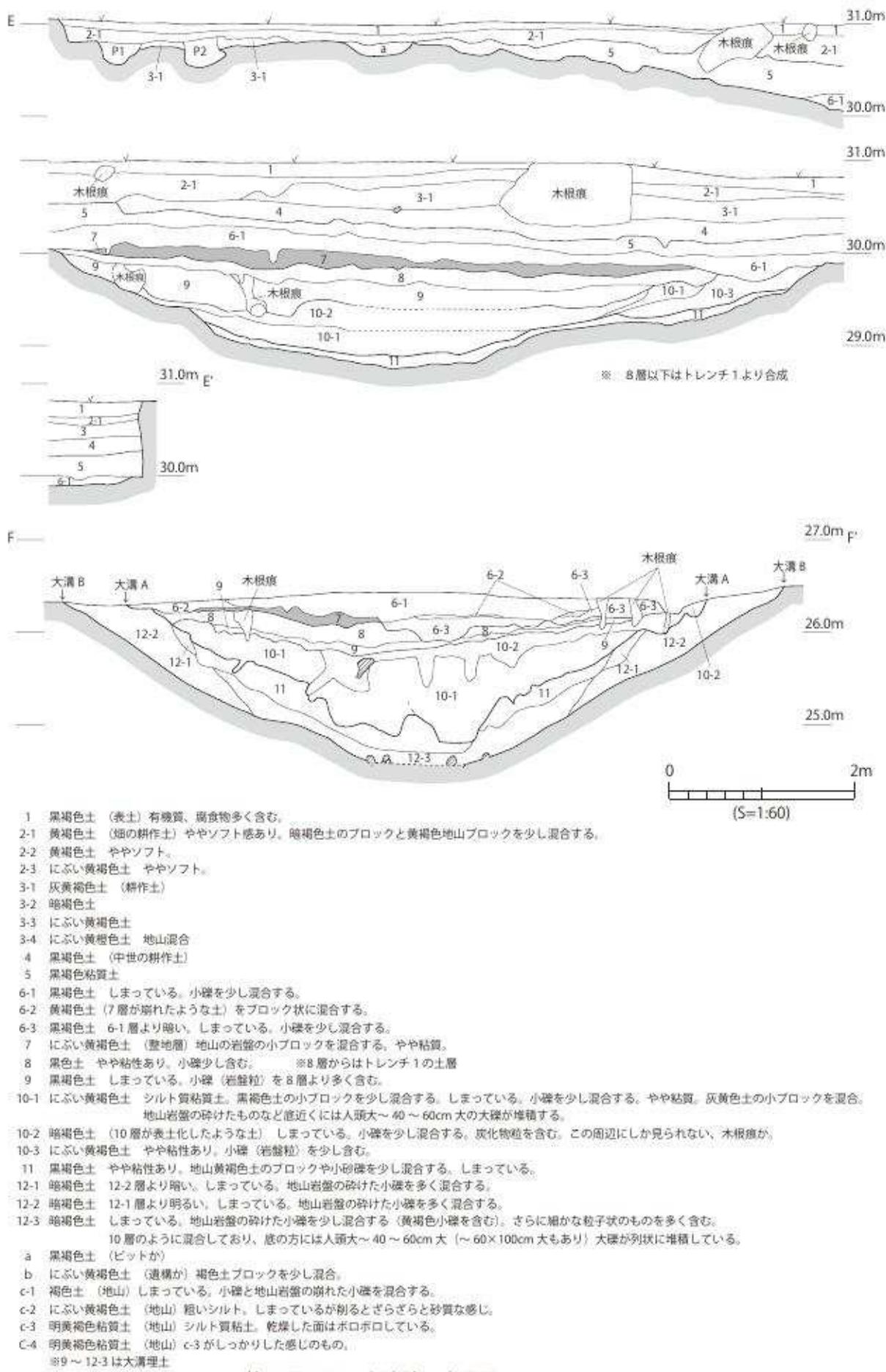
第6図 尾ノ上遺跡 全体図 (S=1:250)

から墓壙の掘り込みを確認したが、墳丘や盛土等は削平によって失われていた（第7図下段）。図上では石棺墓の南東側が段丘状になっているが、これは後世の畑造成によってできたものである（第3章第2節1を参照）。

石棺周辺を精査し、墓壙の掘方プランを検出したが、石棺の蓋石は無く、棺材の一部と思われる石片が周辺に点在していた。また、大溝の上層や包含層掘削段階において、石棺の部材と思われる板状の石材が出土していたことから、後世の破壊状況が推察された。側石の一部と両方の小口部材は失われており、墓壙の上部を含む大部分が消失したものとみられる。墓壙の規模は、長軸2.5m、幅0.85～1.15mを測る隅丸長方形の平面形を呈す。残存する深さは18～21cmを測る。底面には棺材を設置するための溝が両辺部と小口部に掘り込まれており、両辺の側石材が小口材を挟み込む構造であることが推測される。痕跡等を含めて推定される石棺の規模は、長さ1.76m、幅0.33



第7図 尾ノ上遺跡 土層図(1) (S=1:60)



第8図 尾ノ上遺跡 土層図 (2) (S=1:60)

～0.56 mである。墓壙の軸はE-23°-Sで、石棺の平面形から幅広の東南東側が頭部と考えられる。

石棺は北東側に2枚、南西側に3枚の側石が残存していた。側石は長さ30～50cm、幅20cm前後、厚み7cm程度の板石に粗く成形したもので、石材は安山岩である。側石の接合部には、小ぶりな割石が側石を固定するように外側に充て置かれている。側石の大きさと掘り込まれた溝の位置から、側石4枚で構成されていたものと考えられる。側石はハの字状に内傾しているが、側面からの土圧を受けて傾いたものと思われる。

北東側の石棺側石から墓壙掘方までが狭く、掘り込み面が低くなっている。これについては、後世の削平や擾乱による破壊のほか大溝側の掘方上部が崩落、流失した可能性が考えられる。検出レベルからも、本来の掘方は南西側同様もう少し広かったものと思われる。また、低くなった北東側掘方の上方は大溝埋没後の堆積土である第8層の黒色土に覆われている。

墓壙掘方および石棺内から遺物は出土していない。

土坑SK01・02（第9・10図）

箱式石棺墓に近接して小規模な土坑を地山面で2基検出した。SK01は箱式石棺墓から北西へ約1.7m、SK02は北東に0.2m離れた位置で検出された。そこは、大溝の南肩部から斜面にかかる位置である。SK01とSK02の距離は約3.8mを測る。構造は2基とも共通しており、10～30cm大の複数の礫が土坑に落ち込む状況である。礫はいずれも尾ノ上遺跡が立地する丘陵から容易に入手できるもので、石棺墓に使用された石材と共に岩体から採取されたものと考えられる⁽⁴⁾。礫の一部は、土坑検出面より上方で確認されている。近接する石棺墓と同様にこれらの土坑も上部が削平・流失したものと考えられ、本来の掘り込み面は検出した位置より高い位置にあったものと考えられる。これらの土坑は石棺墓と同様に大溝埋没後の第8層の黒色土に覆われている。

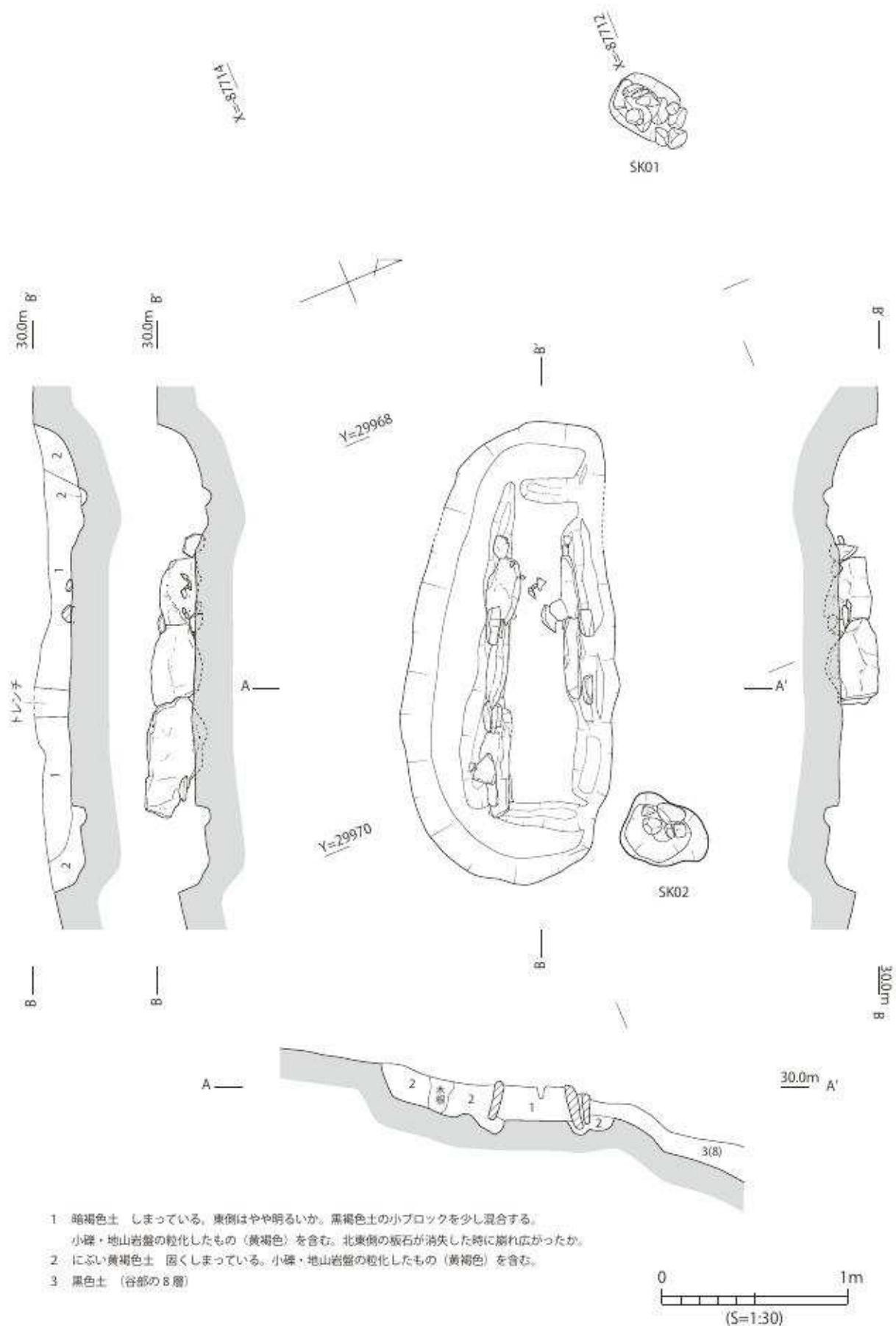
遺物は、SK01から弥生後期の土器破片が2点（第10図1・2）出土している。SK02からは出土していない。

SK01は標高29.9m付近の斜面で検出した。長さ37cm、幅30cmを測る圓丸長方形の平面形を呈す。土坑の軸方向はS-43°-Wである。深さは現状で10cmを測り、地山斜面に対し断面形がL字状を呈すような掘方となっている。土坑内には11個の礫が集まっている。その範囲は長さ44cm、幅21cmを測る。礫は土坑に対し斜面下方側にずれたように検出されている。礫の石材は、安山岩、デイサイト、凝灰岩などで、ほとんどの礫に被熱痕が認められた。

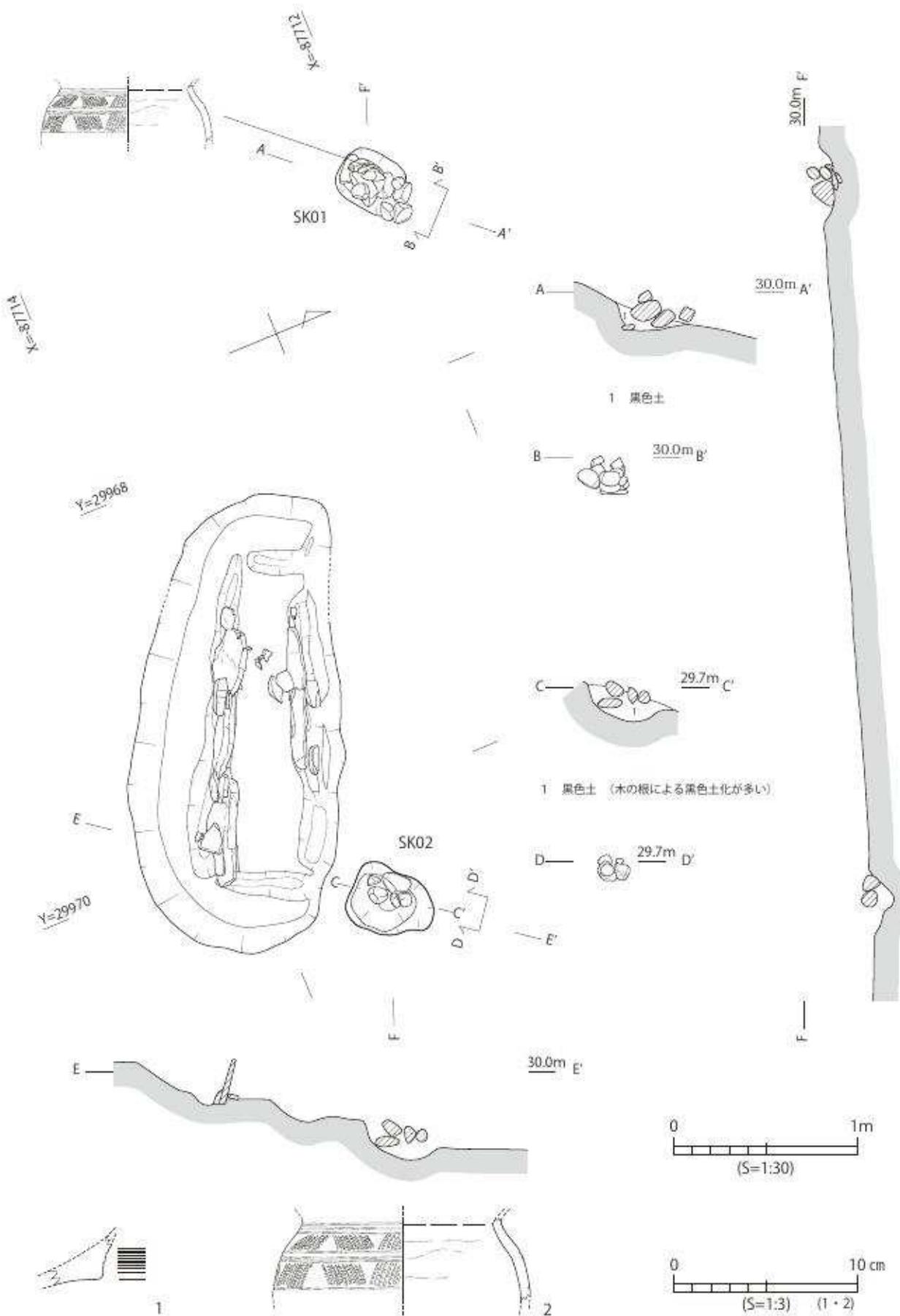
SK02は標高29.7m付近の斜面で検出した。長さ47cm、幅36cmの不整梢円形の平面形を呈す。土坑の軸方向はS-37°-Wであり、箱式石棺墓の主軸に対して直交するように掘り込まれている。深さは現状で14.4cmを測る。椀状の断面形を呈す掘方は、斜面下方にやや伸びる形である。土坑内には5個の礫が収まっている。礫の石材は、箱式石棺墓に使用された石材と同じ安山岩だが、岩石学的に観察される孔が比較的多いものである。箱式石棺墓に近接しているものの、上述のように遺構上部が削平・流失していることもあり、両者の切り合い関係は確認されなかった。

土坑出土遺物（第10図）

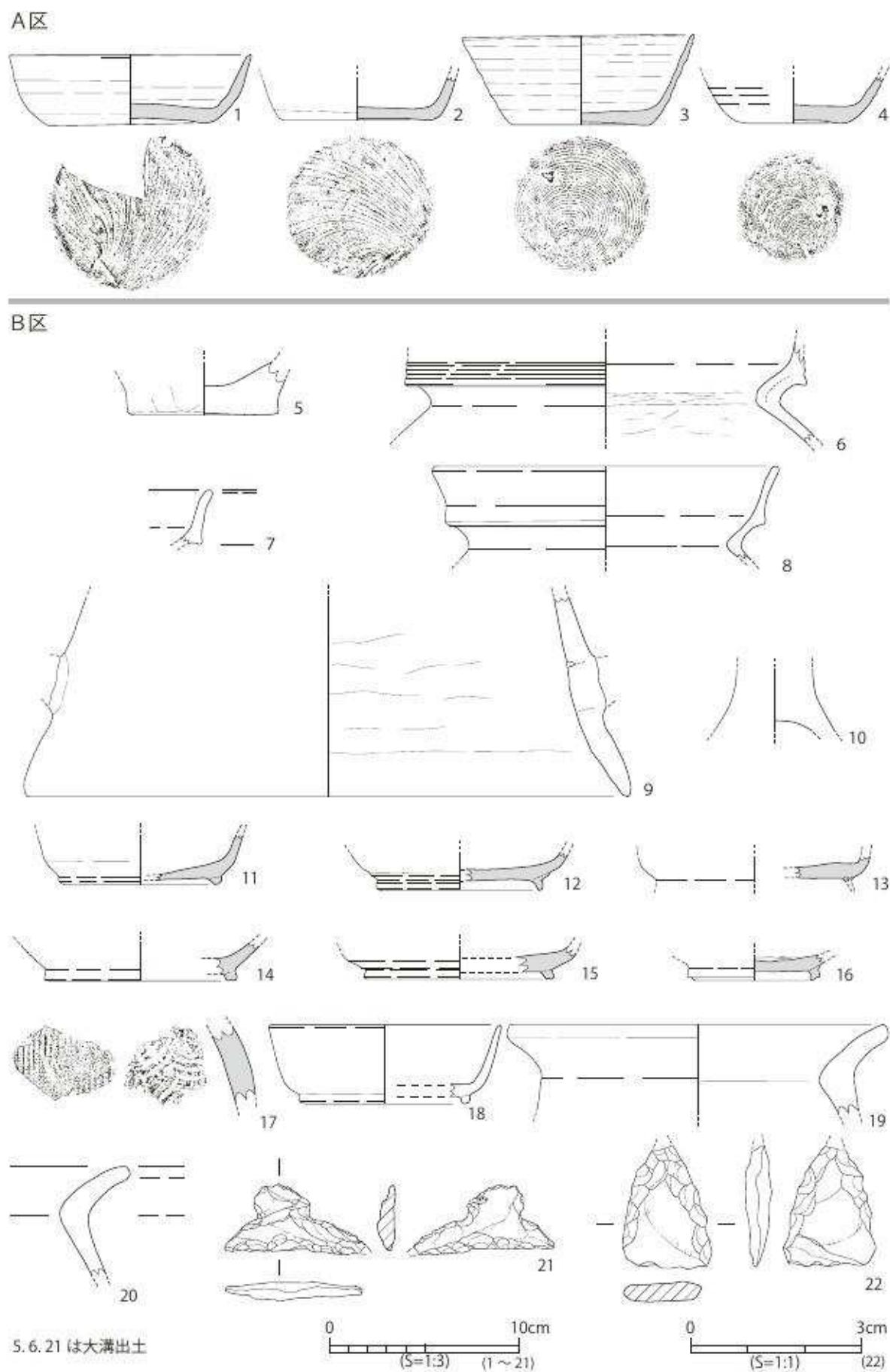
遺物はSK01から出土したものである。第10図1は弥生時代後期の器台の可能性がある。受部外面に凹線文が施されている。2は小型壺の体部で、肩部から胴部にかけて3条の凹線文の間に貝殻腹縁による刺突文を施す。いずれも弥生時代後期後葉の様相を呈している。



第9図 尾ノ上遺跡 箱式石棺墓実測図 (S=1:30)



第10図 尾ノ上遺跡 SK01, 02 実測図 ($S=1:30$)・出土遺物実測図 ($S=1:3$)

第11図 尾ノ上遺跡 包含層出土遺物実測図 ($S=1:3$ ・ $S=1:1$)

包含層出土遺物（第11図）

第11図1～4はA区から出土した須恵器である。1～3は环身である。1、2は底部に静止糸切りが残る。1と2の环身は第6層から出土している。3は底部に回転糸切りが残る。第5層から出土している。4は壺の底部である。回転糸切りが残る。第4層から出土している。

7～10は第8層から出土したものである。7・8は甕の口縁部、9は甑形土器底部、10は高环の脚部でいずれも弥生時代後葉の様相を呈している。

11～17は須恵器である。11～13及び、15と16は高台付、14は甕あるいは壺の底部、17は甕の胴部破片である。15は皿の底部と思われる。11の环は焼成が悪く、白色がかっている。12の环も白色に近いが焼成は良好と思われる。その他の須恵器は灰色かオリーブ色を呈する。これらの須恵器は第6層から出土している。

18は、第6層から出土した土師器の高台付环である。8世紀代に相当しよう。

19及び20は土師器甕の頸部から口縁の破片である。19の甕口縁部は、頸部から大きく外反し、厚みがある。接合する胴部は出土していないが、肩は張らずに底部へと垂下する型式と思われる。第6層から出土している。20も大きく外反する口縁部だが、19に比べると器壁は全体に薄い。胴部はないが、19の甕に比べると肩部から胴部にかけて少し膨らむ傾向にあると思われる。第5層から出土した。22はサヌカイト製の石鎌で、第6層から第7層にかけて出土したものである。

第3節 まとめ

尾ノ上遺跡で検出された大溝は、自然地形に由来する可能性も指摘されたが⁽⁵⁾、掘方の形状および埋土の堆積状況から、谷状地形を利用して掘削された溝であった可能性が高いと考えられる。出土遺物から推定される存続時期は、大溝B段階の弥生時代前期後葉から大溝A段階の弥生時代後期中葉までと考えられる。その間に何度かの掘り直しが行われたことが土層の様相からうかがえた。尾ノ上遺跡の大溝は、その規模から環濠と捉えることも可能であるが、丘陵裾部に位置する今回の調査成果からは直線的に走る約30mの限定的な把握にとどまったため、現状では環濠と特定し得なかった。

A区の大溝南肩部際で検出した箱式石棺墓は、後世の削平と流失および攪乱によってかなり破壊を被っており、石棺の側石が残るのみであったが、残存する状況から以下の様相をうかがい知ることができた。石棺は、墓壙内に据えられた板石4枚からなる側石が小口材を挟む形に復元できる。頭部を東南東に向け、埋没したかつての大溝の南肩部近くにあって軸方位を沿わせているように見受けられる。墓壙の一部（大溝側にあたる北東部上方）には、大溝埋没後の堆積土である弥生時代後期後葉の第8層が覆土としてみられた。また、調査区の東側は南に延びる尾根が下っているなど、この石棺墓は当時できていた大溝埋没後の浅い谷状地形のために小高い台地状となっていた突端に立地していたものと想像される。このような地形を利用した小規模な墳丘を有していた可能性が考えられる。他に埋葬施設は確認されず、その墳形及び外表施設の実態は流失や削平のため把握できなかったが、地形に制約されたその規模は石棺墓の位置から、5mを大きく超えるものではないと思われる。築造時期については、出土遺物がなく墳形も不明なため現状では断定しがたいが、第8層が覆土になることを積極的に評価するならば、弥生時代後期後半が想定されよう。ただし、第8

層の堆積は墓壙の一部に認められるにすぎないため、ここでは、ひとつの可能性としてとどめておきたい。

石棺墓に隣接して2基の土坑(SK01・02)が確認された。土坑については、後世の削平と流失を考慮すれば、本来は土坑内に複数の礫が収まっていたものと考えられる。SK01で検出された礫のほとんどに見られた被熱痕からは、火を受けた礫が後に土坑に廃棄された状況がうかがえる。時期は、SK01の出土遺物から弥生時代後期後葉と考えられ、同様の形態をもつSK02も近接する位置関係から同時期の可能性が考えられる。

また、2基の土坑は、大溝の南肩部際に立地する石棺墓の主軸に合わせて配置されているように見受けられる。石材に関して言えば、両者とも遺跡の立地する丘陵山塊中の礫を使用しているという共通点をもち、SK02検出の礫は岩石学的に石棺墓の石材と類似する安山岩であった⁽⁴⁾。以上から、これらの土坑の性格については、石棺墓に使用された礫や石棺の破材などが土坑に廃棄されたもの、あるいは、墳墓祭祀に伴うものなどの可能性が考えられる。両者の新旧関係や石棺墓の時期が特定できない現状では、判断しがたいところがあるが、このように石棺墓と土坑との間に何らかの関係性をみることができよう。

【註】

- (1) 中村唯史氏の御教示による。
- (2) (1)と同じ。
- (3) (1)と同じ。なお、大溝の周囲に土壘などが構築されており、それが崩壊し堆積した可能性も考えられる。また、石の材質は安山岩、デイサイト、凝灰岩、流紋岩などで、いずれもこの山塊中の岩塊から供給されたか、もしくは數キロメートル以内の近隣で産出するものである。
- (4) (1)と同じ。
- (5) (1)と同じ。
- (6) (1)と同じ。

第4章 桜田遺跡の調査成果

第1節 桜田遺跡の調査概要

1. 発掘調査区の設定（第12・13図）

桜田遺跡は、大田市鳥井町鳥井に所在している。大田市北部の鳥井丘陵の西側にあり、北に向かって開ける丘陵谷部の標高18～26mに立地する。調査前は、丘陵斜面は植林区域となっており、谷部は近代以降の石垣で構築された棚田跡であった。丘陵斜面に沿って谷の奥に向かって延びる小道が数箇所認められる。本調査は、平成29年度と平成30年度の2次に及ぶ。調査区は、谷を挟んで東西に対峙する位置にあるため、平成29年度に調査した西側部分を1区、平成30年度に調査した東側部分を2区とした。

1区では、横穴墓1基と近世以降のものと考えられる石切場を確認した。また、溝状遺構1条を検出した。丘陵斜面は急峻で、南側約3分の1が落ち窪んだ形状となっており、当初は地滑りなどの崩落によるものと考えていた。しかし、崩落土の除去段階で方形に穿たれた岩盤を検出したことから、周辺を精査した結果、崩落と考えられた落ち窪んだ広範囲が石切場の跡であることが判明した。調査範囲は、最大幅17m、長さ約80mを測るが、横穴墓や石切場などを検出した範囲は幅2～8m、長さ65mである。

2区では、土坑2基と道路と思われる溝状遺構1条を確認した。溝状遺構は、T5において谷奥に向かう小道の直下で確認したものである。調査範囲は幅7m、長さ27mを測る。

1区・2区とも遺構を検出した範囲が狭小なため、グリッドは設定していない。



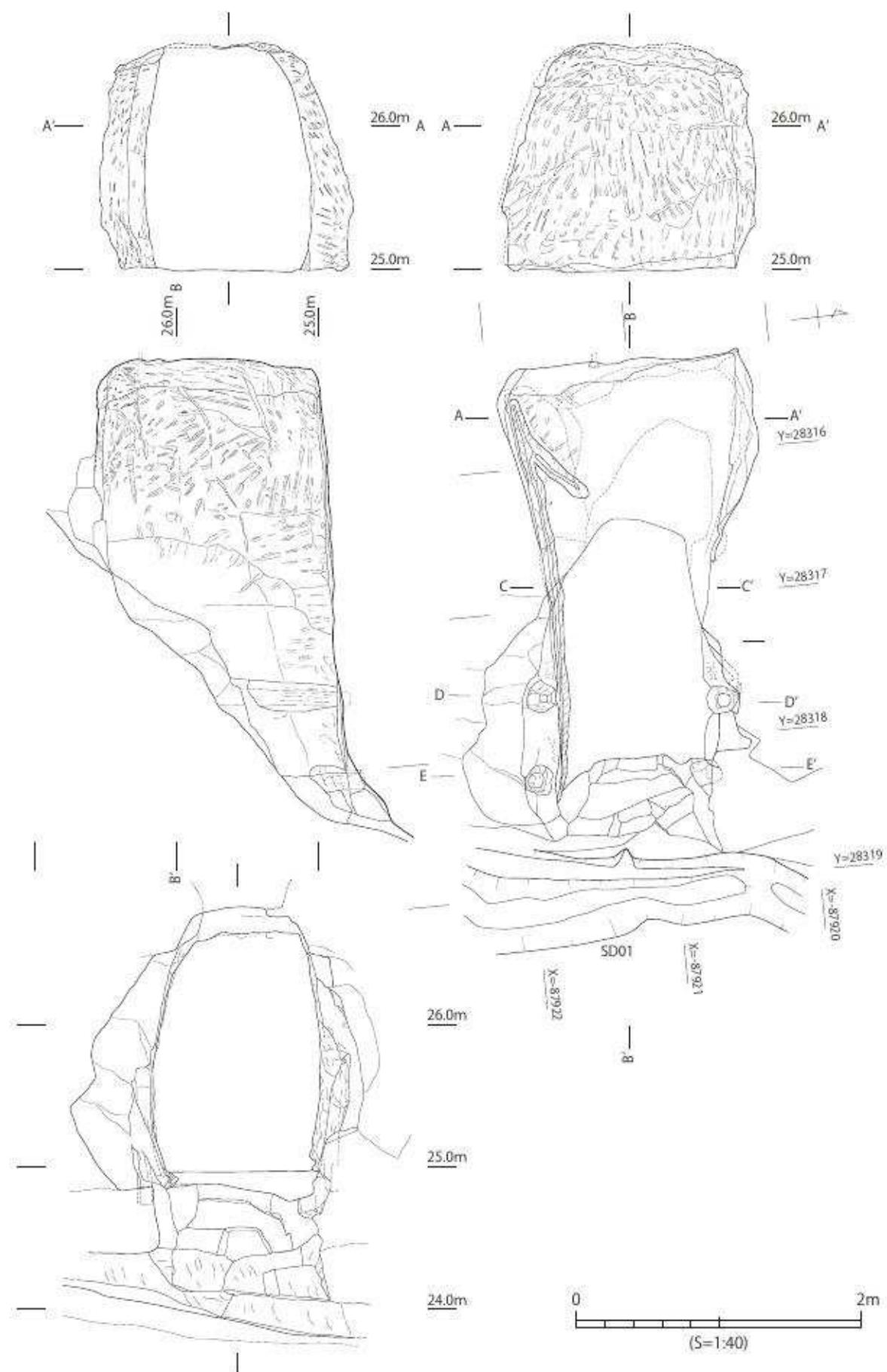
第12図 桜田遺跡の位置と周辺地形 (S=1:25,000)



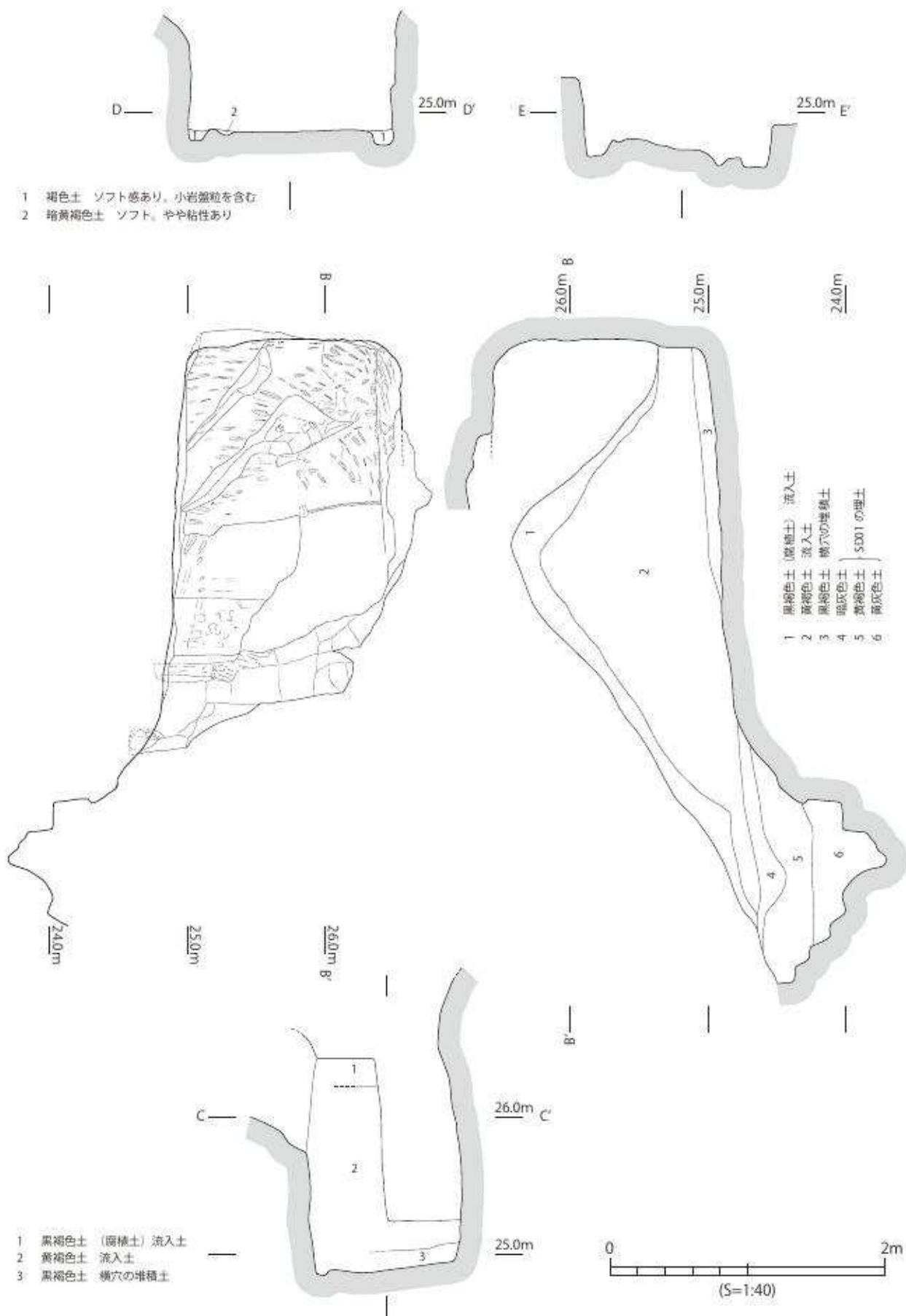
第13図 桜田遺跡の調査位置図 ($S=1:1500$)



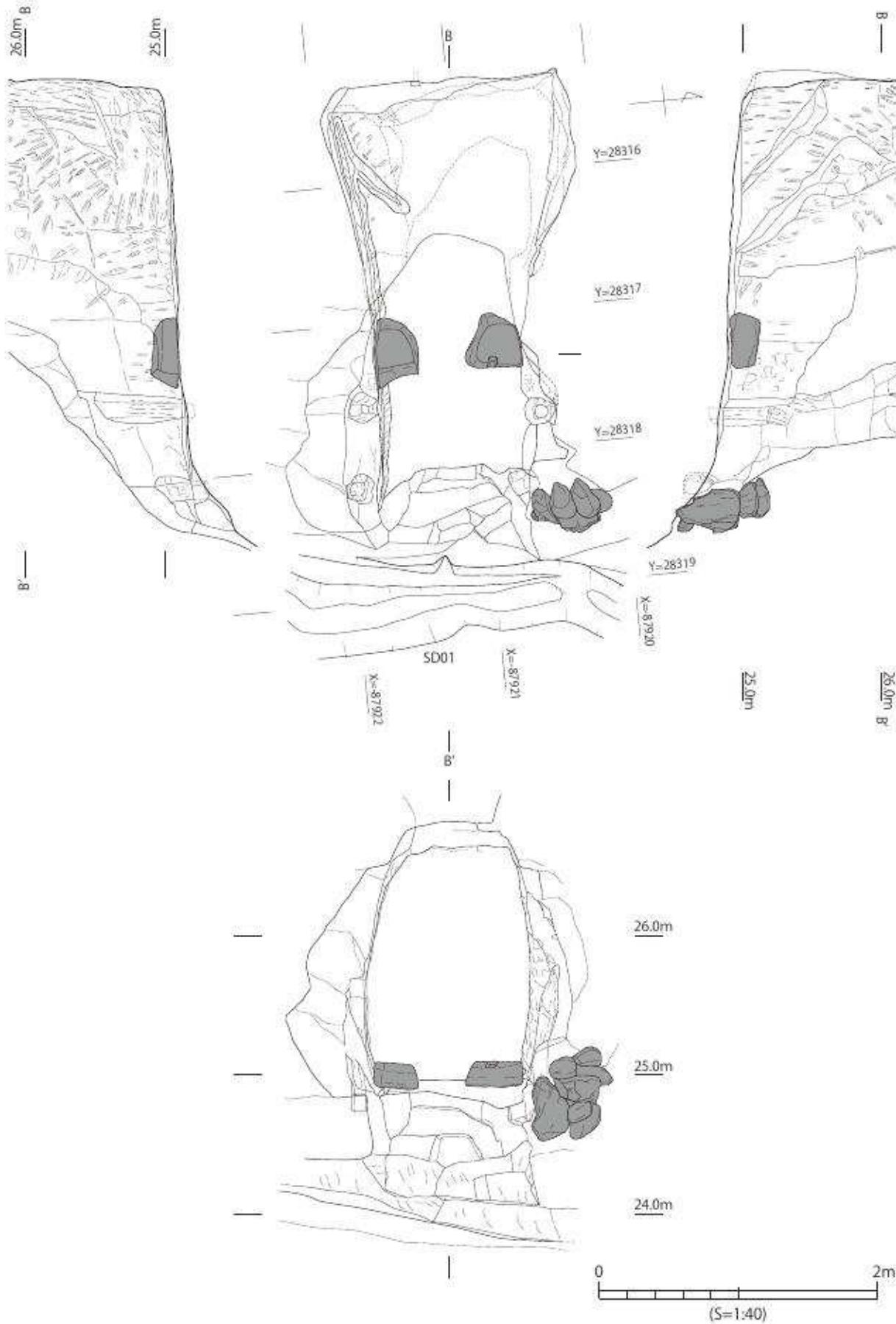
第14図 桜田遺跡1区 平面図・立面図 (S=1:400)



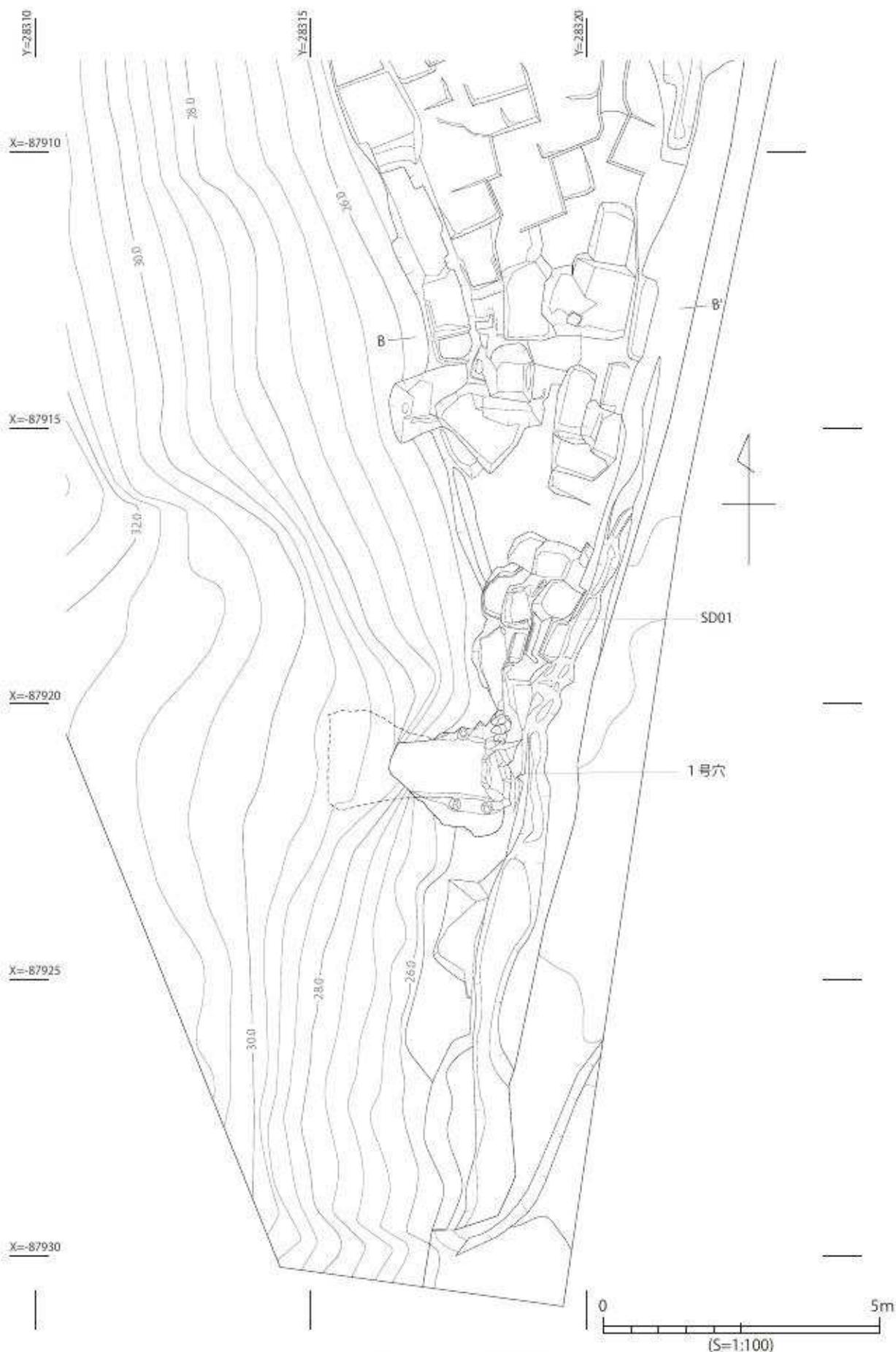
第15図 桜田遺跡1区 1号穴実測図(1) (S=1:40)



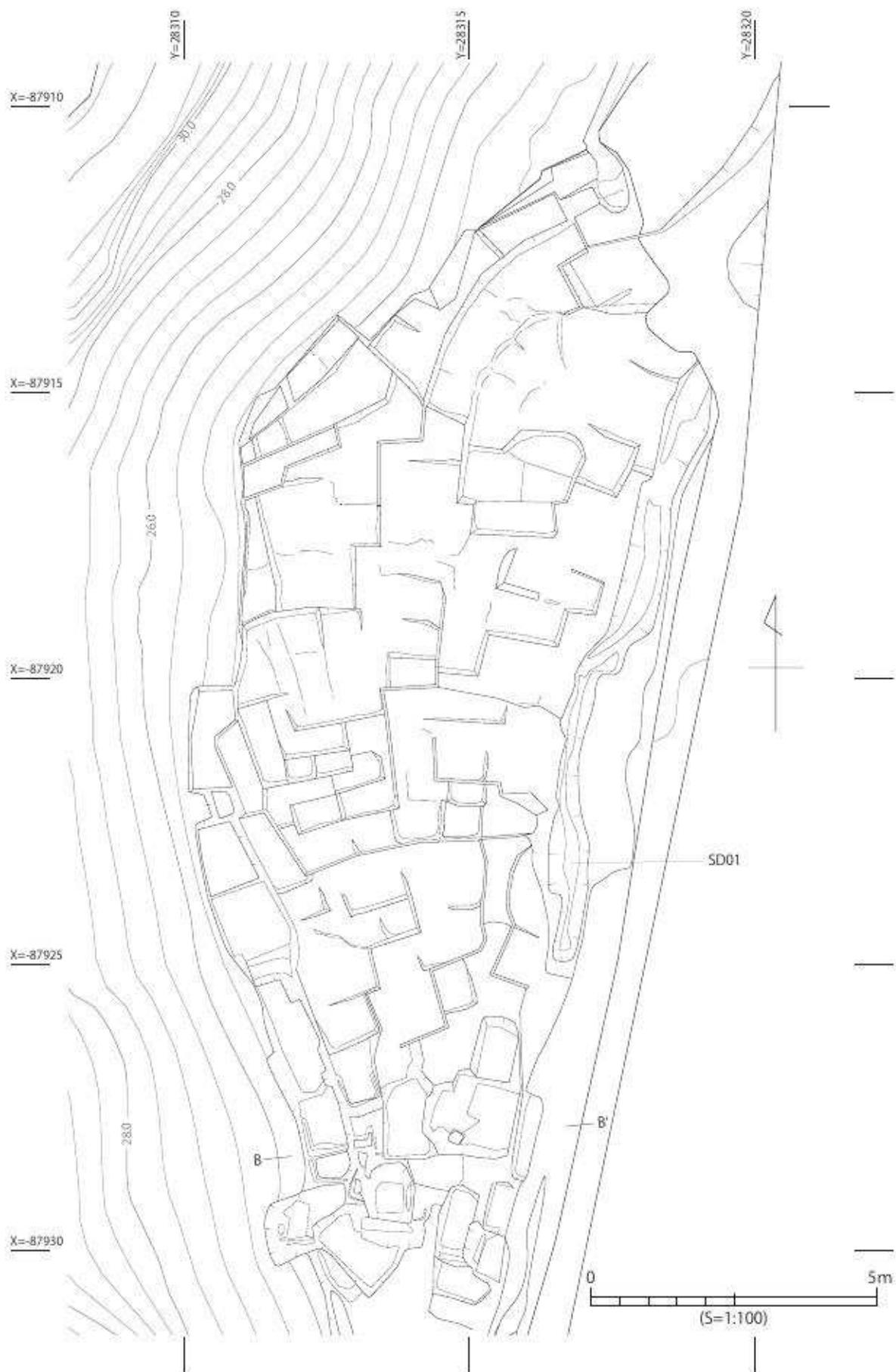
第16図 桜田遺跡1区 1号穴実測図（2）(S=1:40)



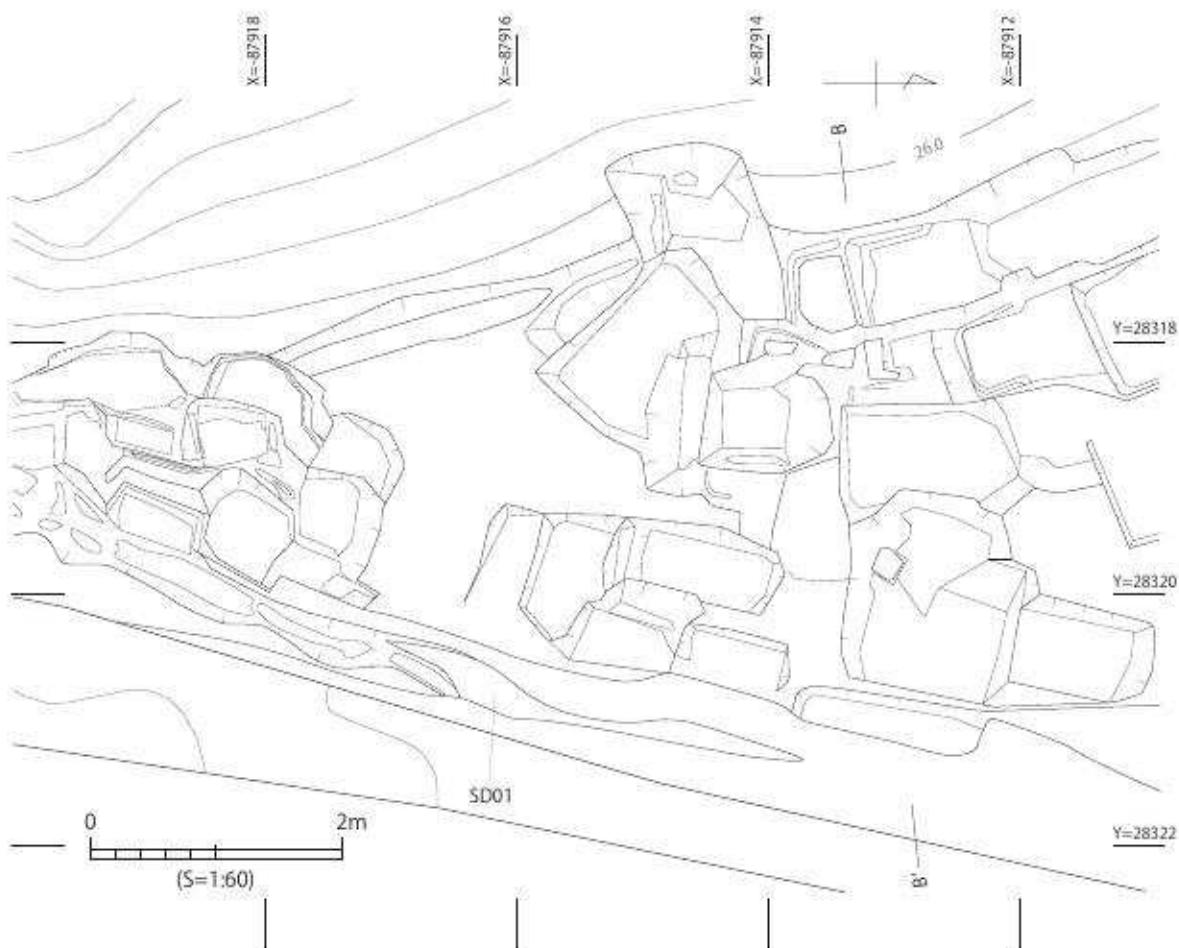
第17図 桜田遺跡1区 1号穴閉塞石実測図 ($S=1:40$)



第18図 桜田遺跡1区 石切場実測図(1) (S=1:100)

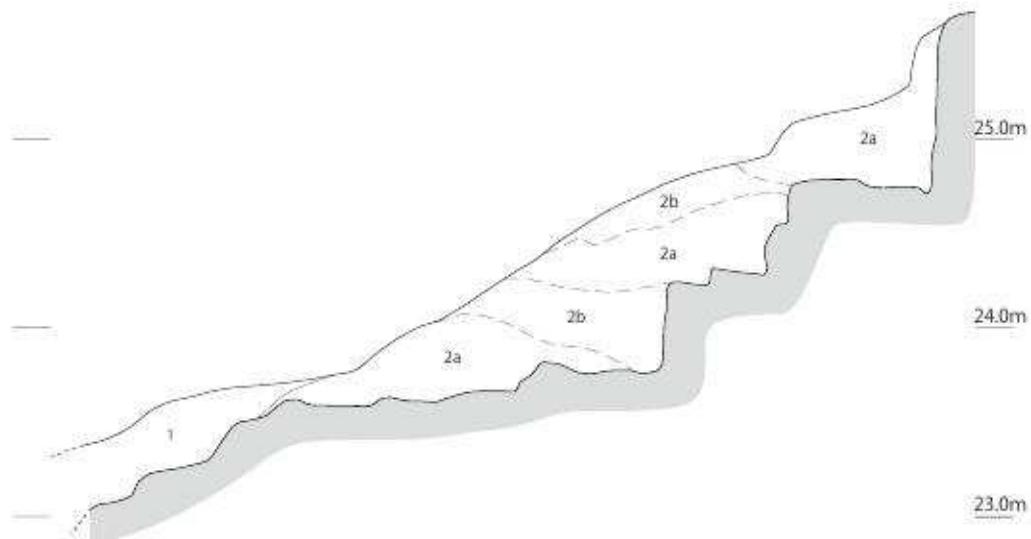


第19図 桜田遺跡1区 石切場実測図（2）(S=1:100)

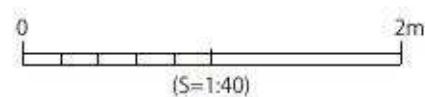


第20図 桜田遺跡1区 石切場実測図(3) (S=1:60)

B'— 26.0m B



- 1 明赤褐色土 (SD01の埋土) 岩盤の碎石と礫を多く混合する。もろいが土自体には粘性あり。5YR 3/6
- 2a 赤褐色土 岩盤の碎石礫を多く混合する。赤褐色土自体にはやや粘性あるがもろい。5YR 4/6
- 2b 暗黄褐色土 2a層同様岩盤の碎石礫を多く混合する。もろい。10YR 5/2

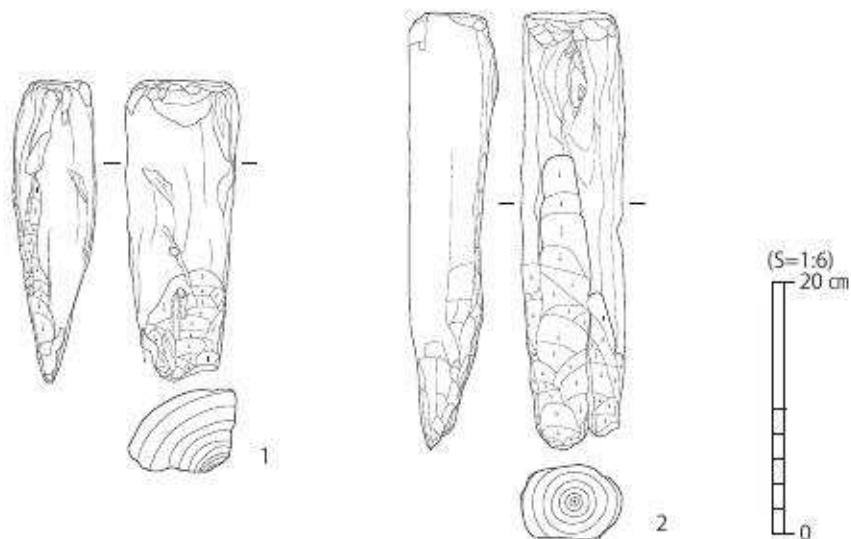


第21図 桜田遺跡1区 石切場(B-B') 土層図 (S=1:40)

た溝と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、埋土の様相から、石切場に伴う溝もしくはそれ以降の溝と考えられる。この溝が埋没した後、丘陵裾を谷奥に進む現道となる。

1区包含層出土遺物（第22図）

1区では石切場の底面上の覆土から木製品が2点出土した。いずれも芯持ち材を割って作られ、下端は刃物で鋭角に加工されている。1の頭部には敲打痕がみられ、2の下端部にはつぶれ痕が観察される。これらは、楔の可能性が考えられる。



第22図 桜田遺跡1区 包含層出土遺物実測図 (S=1:6)

第3節 2区の調査

1. 2区の基本層序（第23図）

調査区は北側と中央と南側で、土層堆積や地山の様相が異なっている。

調査区北側は東に向かって開く小谷が入り込んでいる影響で、谷部を埋めた10～20cmの礫を含んだ暗褐色粘質土が堆積し、凝灰岩等の岩盤は検出できなかった。

中央は、調査前に工事用道路敷設のため道路状に盛土造成が行われている。灰白色砂質土（1層）やオリーブ黄色土（2層）の造成土が0.4～1mほど堆積し、その下層に、西側では水田造成土（3、6、7層）が、東側では浅黄色粘質土や灰色砂質土が互層状に堆積している（8、9層）。互層状に堆積している土層下は灰白色的岩盤が、谷底に向かって緩やかに傾斜して広がり、8・9層は岩盤の上を流れた土砂が堆積したものと考えられる。凝灰岩の岩盤は平面的に2区全体に広がらず、2区中央のみで検出され、その周囲に砂岩が広がっている。旧地形は凝灰岩の岩盤が谷に向かって舌状に伸び、その場所に遺構が位置している。

調査区南側は、厚さ1mの造成土の下層で風化して砂質気味な黄色岩盤を検出したが、軟質である。

2. 検出遺構と遺物

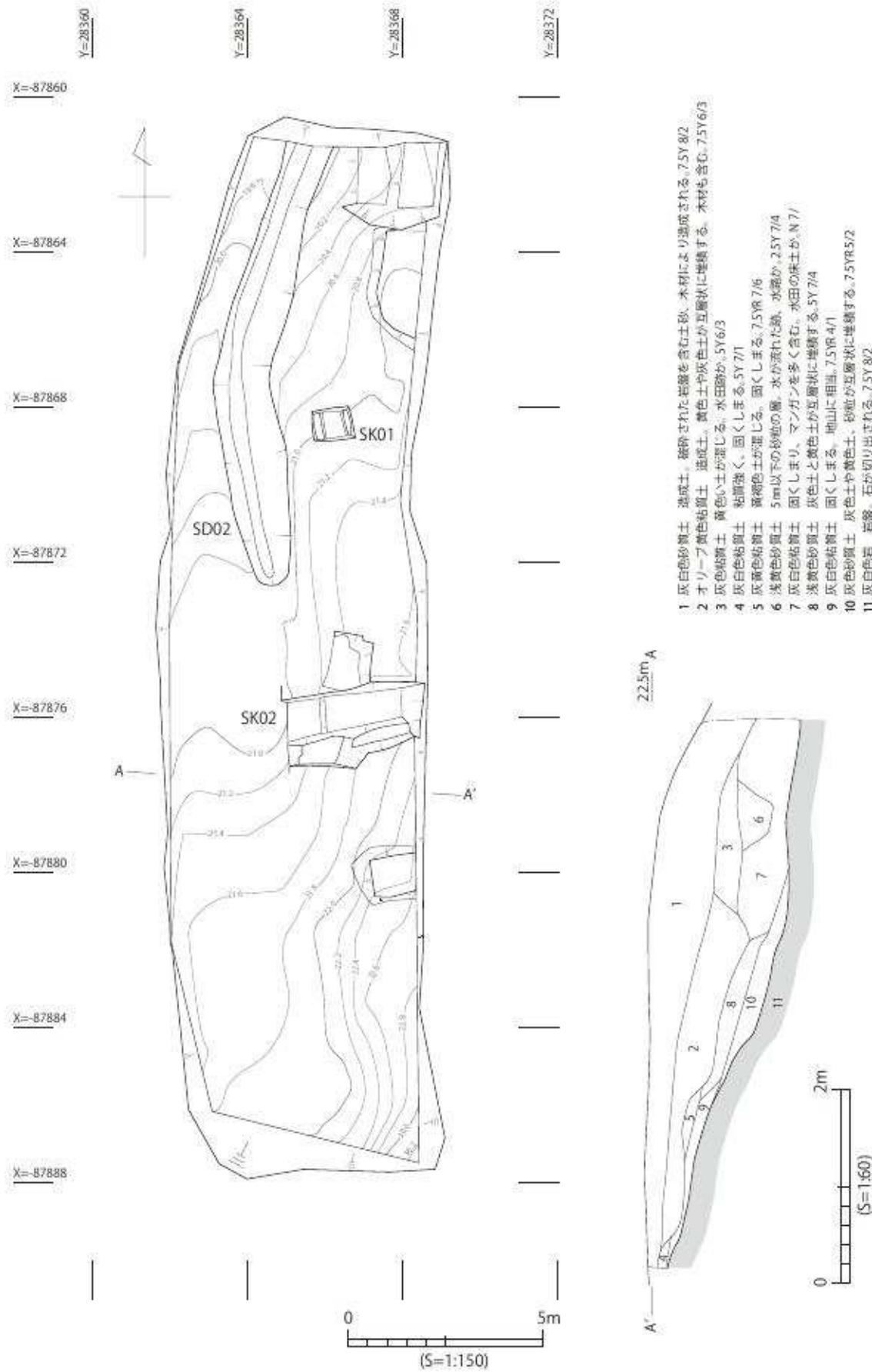
遺構は、岩盤上から土坑2基、溝状遺構1条を検出した。遺構面は東側から西側に傾斜する緩斜面で、標高は南東側22.5m、南西側21.4m、北東側20.4m、北西側19.6mである。

SK01（第24図）

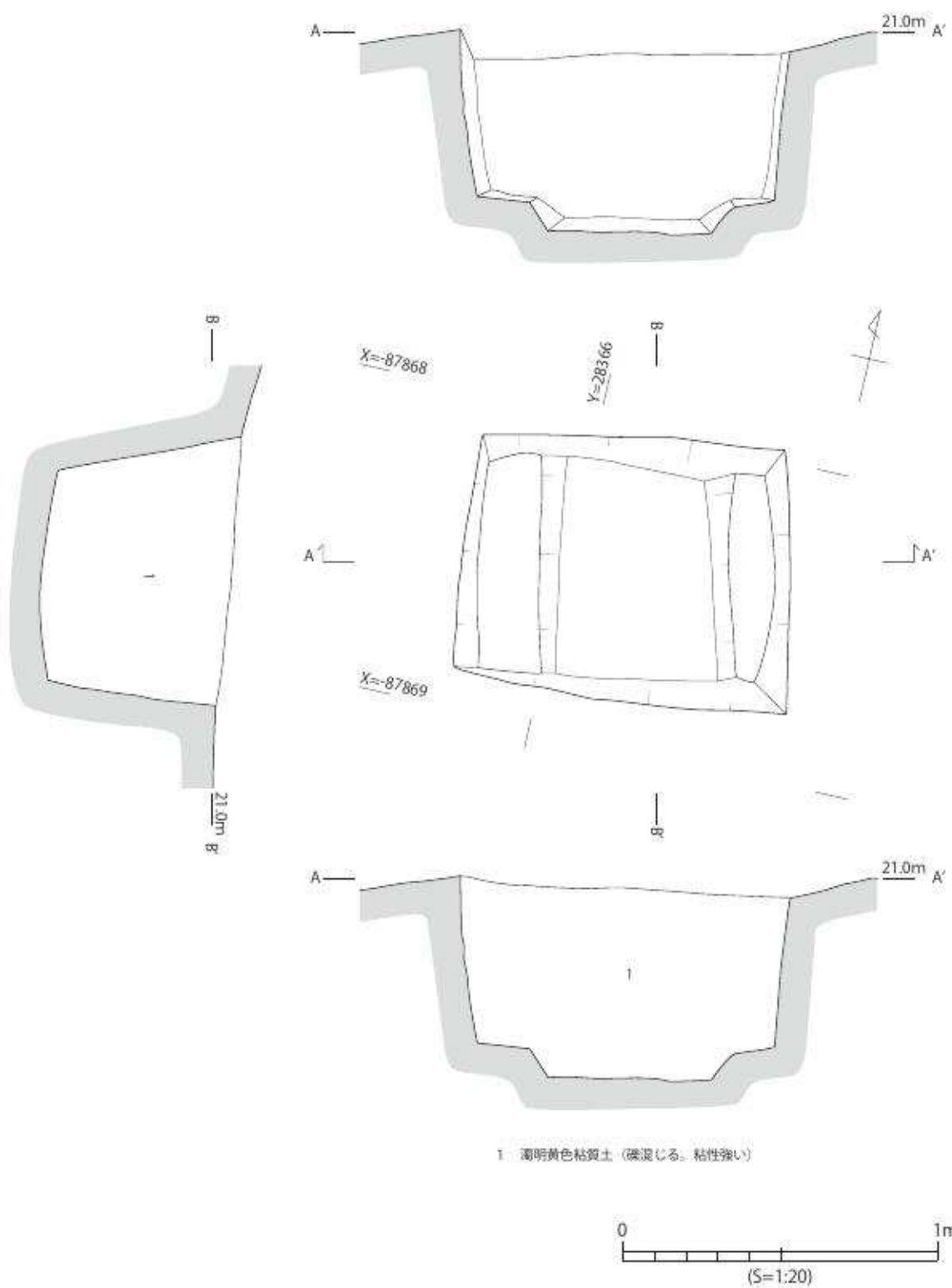
長さ1.05m、上幅0.75m、下幅0.65m深さ0.6mを測る長方形を呈する土坑である。床面は平坦で、長さ0.95mを測り、中央部の長さ0.6cmの範囲が深さ0.1mほど一段掘り窪められ、東側と西側の床面が一段高くなっている。土層は単層である。側面の下方には工具痕が斜め方向に残る。深さが浅いことから土葬墓とは考えられず、性格は不明である。

SK02（第25図）

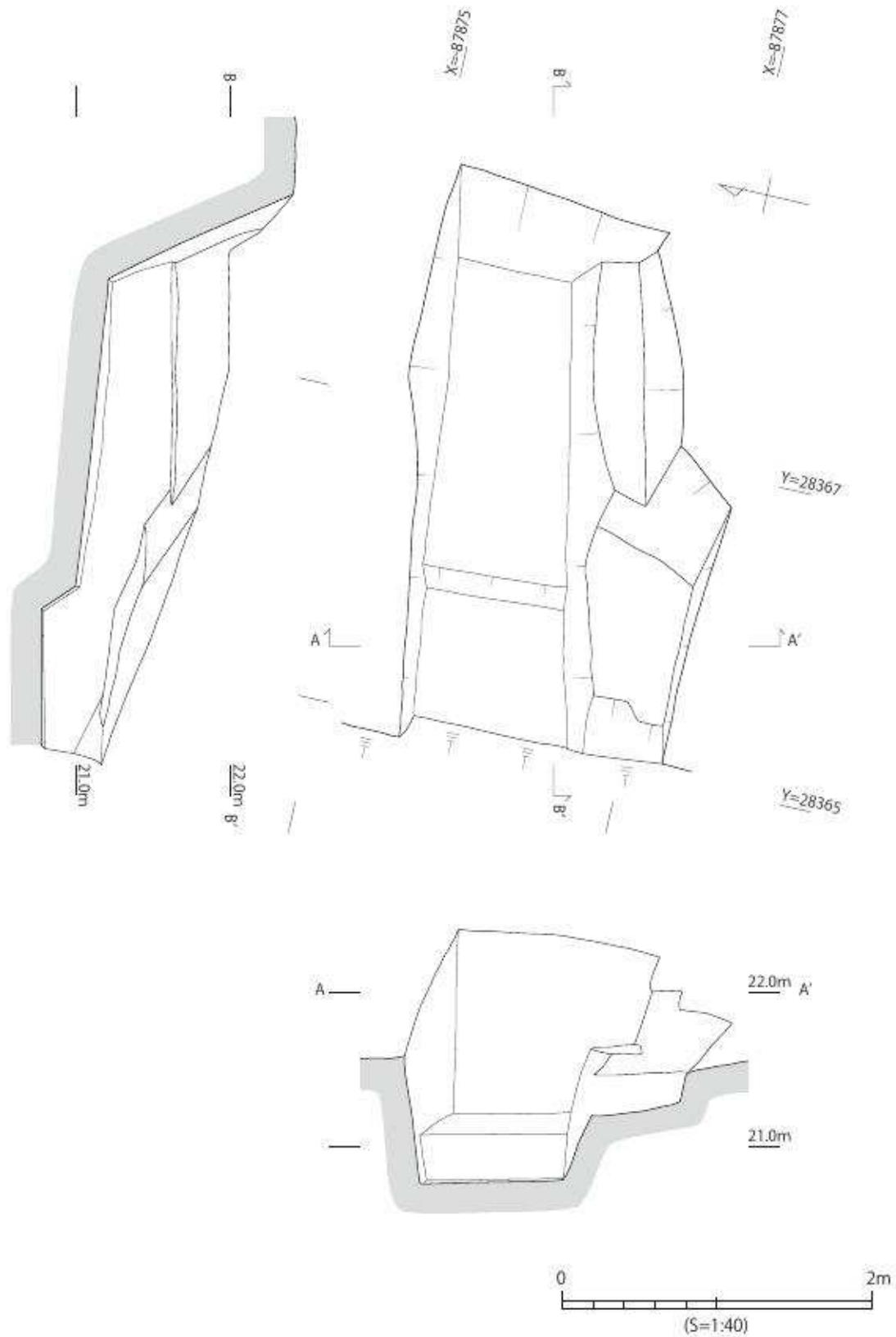
東西長さ3.5m、幅2.0m、深さ0.8mを測る長方形に掘り込まれた土坑である。SK02以南には砂岩が広がる。北側は凝灰岩をほぼ垂直に0.8mほど掘り込む。南側は砂岩を0.3mほど掘り下げ、一度平坦面を作り出し、さらに0.4mほど凝灰岩を掘り下げている。床面は東端から2.0mの所で、0.2mほど一段下がり、西端は凝灰岩がなくなり砂岩となる。凝灰岩の壁面にはつるはし状工具と考えられる筋状の工具痕が認められる。凝灰岩を掘り出している範囲は下幅0.8cm、高さ0.8～1.2m、長さは上段で2.0m、下段で0.9mを測る。土層は互層状の堆積で、自然堆積で埋没したと考えられる。この土坑は長方形の石を切り出したと考えられるが、床面には側壁に沿った溝がなく、床面前面（西側）にも切り出す石⁽²⁾を剥ぎ取るための加工痕がなく、明確に石を切り出したものと断定することは難しい。機械掘削ではなく、工具痕等から近世以降と考えられる。



第23図 桜田遺跡2区 遺構配置図 (S=1:150)



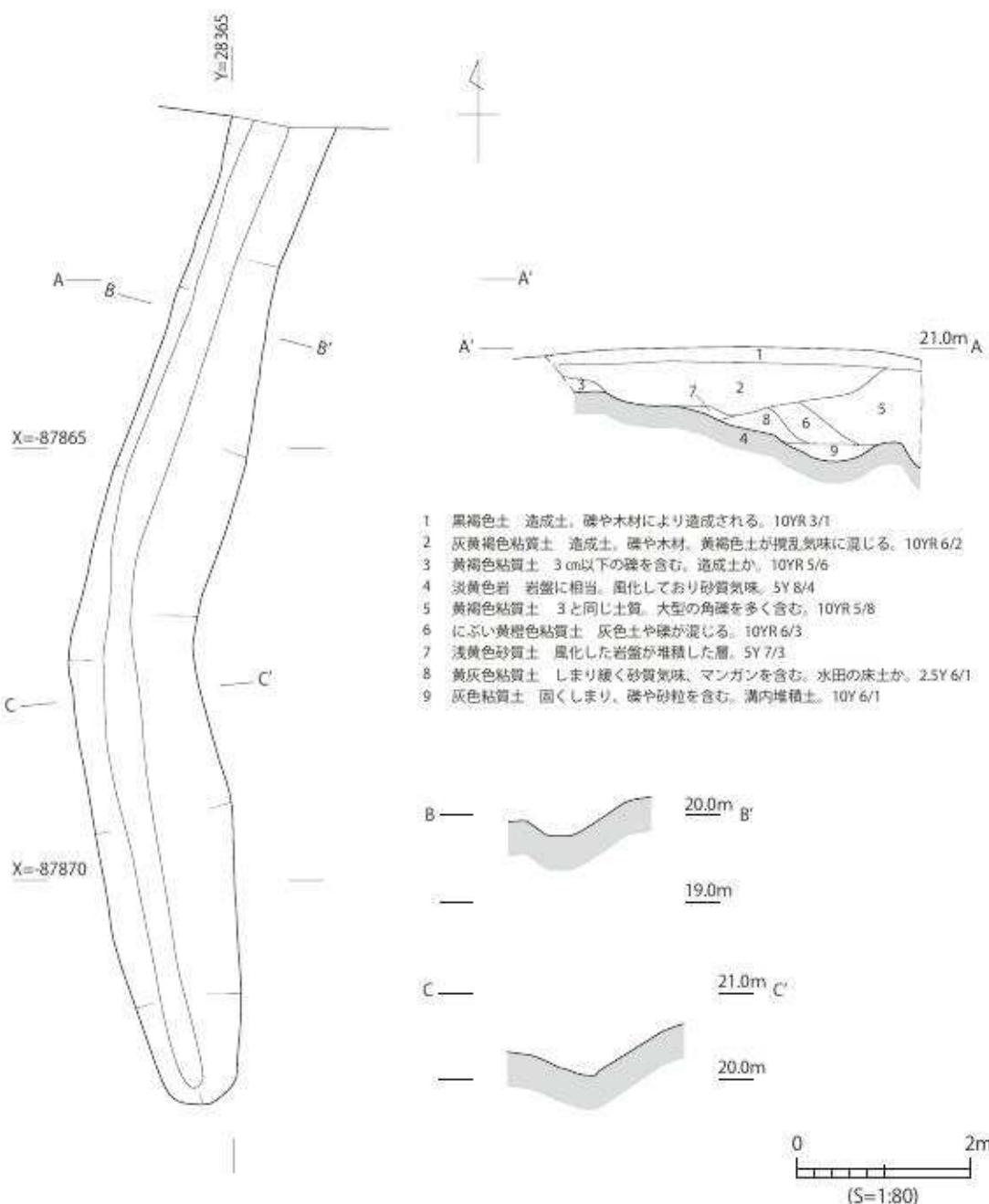
第24図 桜田遺跡2区 SK01 実測図 (S=1:20)



第25図 桜田遺跡2区 SK02 実測図 (S=1:40)

SD02 (第26図)

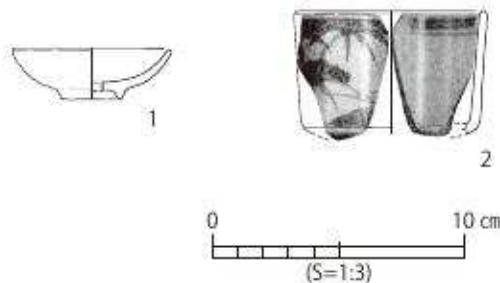
上幅0.6～1.4m、下幅0.2～0.4m、長さ12mを測り、断面U字形の溝状遺構である。平面は中央でわずかに屈曲し、床面は南側から北側に傾斜している。土層は造成土と思われる土が堆積している。上層には現道や試掘確認調査において現道以前の道と考えられる落ち込みが確認されていることから、溝状遺構は道路の可能性が考えられる。



第26図 桜田遺跡2区 SD02 実測図 (S=1:80)

2区包含層出土遺物（第27図）

2区では遺構面を覆う土層から陶磁器が5点出土した。1は肥前系磁器の紅皿で、高台端部の露胎である。18世紀代。2は肥前系磁器の筒形碗で、胴部外面に笠文、口縁部内面に圈線が描かれる。18世紀後葉から19世紀初頭。その他に18世紀前半代の肥前系陶器鉢や18世紀後葉から19世紀初めの肥前系磁器の丸皿が出土している。



第27図 桜田遺跡2区 包含層出土遺物実測図 (S=1:3)

第4節 まとめ

桜田遺跡1区の調査では、試掘調査時に確認していた横穴墓に加え、当初把握していなかった石切場を確認することとなった。

1号穴については、試掘調査段階から横穴墓という認識をもって調査を進めていた。全体の形状や閉塞石に相当する礫の検出などの状況から、横穴墓として捉えられるものと考える。しかし、調査を進めるなかで、この地域の横穴墓としては玄室の天井が高いことや黒く煤けた内部、壁面に穿たれた複数の不自然な穴、前庭部両脇に残る柱穴状の穴など、横穴墓以外の性格をしめす要素が確認された。また、貯蔵穴や岩窟の可能性も考えられ、中世以降の土器片がわずかに流入土から出土するのみで、年代が特定できない状況である。しかしながら、これらの要素は、後世に横穴墓が改変され他の用途に二次利用された結果と捉えられよう。

石切場は、石材となる凝灰岩の地質的形成位置に制約されて、現地表に近い岩盤層を採掘している。規模は、最大奥行き7m、長さ50mを測り、標高26m～19.5mにかけて採掘されている。方形に切り出した工具痕が明瞭に残り、「溝切り技法」によってある程度の規格性がある大小の立方体を採掘していたものと思われる。石切場付近からは楔状木製品（第22図-1・2）が出土しているが、石切り作業に使用されていた可能性が考えられる。また、本遺跡の凝灰岩は比較的脆いもので、地元の人々の話では、このような軟弱な材質の切り石は、近代以前の竪突や竪の材料とされたという⁽³⁾。ただし、本遺跡から切り出された石材の具体的な使用法については資料に乏しく検討を要する。

調査区の東端部で確認された岩盤を穿って敷設された溝（SD01）は、石切場の操業に伴う排水溝、もしくはそれ以降の溝と考えられる。

2区では、性格不明のSK01と道路の可能性が考えられるSD02、1区から確認された石切場と同質の石材を切り出すための試掘の可能性があるSK02が検出された。2区は、1区のような凝灰岩の岩盤が発達せず、斜面全面に展開する大々的な石材の採掘は行われなかつたことがわかった。遺構面を覆っていた土層から18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器が出土していることから、それ以前と考えられるが、明確な時期は不明であった。

【註】

(1) 溝切技法では側面を切った後に前面から床面を削って石材を切り出す。

島根県教育委員会 1997『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大井谷石切場跡・上塩治横穴墓群第14支群・上塩治横穴墓群第15支群・上塩治横穴墓群第16支群』

(2) (1)と同じ。

(3) 大田市波根町の上川内地区では、近くの石切場（沼谷の石切場）から切り出された石が、家の土台や石垣などの建築用材として使われていたという。波根むかし語りの会 2017「上川内の史跡と旭山城」『波根むかし語りの会 3月例会見学資料』

第2表 桜田遺跡 出土遺物観察表

出土土器

団番号	写真	出土地点	層位	種別	器種	口径(cm)	幅(cm)	底径(cm)	胎土	色調		調整・文様	焼成	遺存	備考
										胎土：灰白	7.5Y 8/1				
27 1	22	2区・トレンチ4		肥前系磁器	紅皿	16.3	2.05	2.23	精良	胎土：灰白	7.5Y 8/1	美輪	良好	1/4	18C代
27 2	22	2区	茶褐色土下 (造成土)	肥前磁器	筒形碗	17.5			精良	胎土：灰白 釉薬：青灰～暗青灰	10Y 8/1 5B 5/1～5B 4/1	施釉・芭文	良好	1/3 以下	18C後半～19C初

木器

団番号	写真	出土地点	層位	種別	器種	計測値			形態・文様の特徴	木取り	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
22 1	22	1区・石切場付近		木製品	櫻か	23.9	9.1	6.4	芯持材	ミカン削り	
22 2	22	1区・石切場付近		木製品	櫻か	34.7	8.3 × 7.1		芯持材		

第5章 総括

第1節 尾ノ上遺跡

1. 大溝

尾ノ上遺跡で検出した大溝は、遺跡の立地する鳥井丘陵の東南端部にあたる標高30～25mの緩斜面に位置する。元々の谷状地形を利用してできた東西方向の溝である。全長30m、最大幅8m、深さ最深1.8mの規模を有し、二段階の様相と掘り直しの状況がうかがえた。大溝の時期は弥生時代前期後葉～後期中葉と考えられるが、この時期の遺跡としては同じ鳥井丘陵にあって尾ノ上遺跡の西側丘陵上に展開する御堂谷遺跡が注目される。

御堂谷遺跡では弥生時代前期後葉の土器が大量に検出されており、弥生時代中期末葉から後期前半の竪穴建物が確認された、当該時期には山陰沿岸でも数少ない高地性集落である（島根県教育委員会2019）。尾ノ上遺跡と御堂谷遺跡とは直線距離で約100m、標高差約25mの位置にある。大溝の下流側は15mほど先で丘陵端に至り、丘陵裾にできた谷を走る道路に突きあたる。上流側の状況は不明であるが、標高53mの御堂谷遺跡が位置する低丘陵の北東側には尾ノ上遺跡に通じる狭い谷部がみられることから、大溝はこの方向に向かっていることが推測される（第4図）。このことから、尾ノ上遺跡の大溝を御堂谷遺跡と有機的に結び付けて考える必要があろう。大溝から出土した遺物は上流の御堂谷遺跡から運ばれ堆積したものとみることも可能なことから、尾ノ上遺跡が御堂谷遺跡の外郭的な遺跡として存在していた可能性が考えられる。

これまでのところ、山陰沿岸部における大溝、あるいは環濠の検出例は、弥生時代前期後半に一つのピークがあり、その多くは丘陵上や台地縁辺部に位置している。山陰西部から類例を列举すれば、尾ノ上遺跡（本書）、島根県雲南市三刀屋町の要害遺跡（島根県教育委員会2001）、島根県松江市の田和山遺跡（松江市教育委員会2005）、島根県安来市伯太町の経塚鼻遺跡（安来市教育委員会2006）、鳥取県西伯郡南部町の諸木遺跡（会見町教育委員会1982）、同町の宮尾遺跡（会見町教育委員会1982）、同町の天王原遺跡（会見町教育委員会1993）、同町の清水谷遺跡（西伯町教育委員会1992）、鳥取県大山町の大塚岩田遺跡（財団法人鳥取県教育文化財団2001）等がある。また、沖積低地にある拠点集落の島根県松江市の西川津遺跡（島根県教育委員会2013）や同市の佐太前遺跡（松江市教育委員会2010）でも大溝（環濠）が見つかっている。

尾ノ上遺跡が立地する鳥井丘陵上には丘陵の中心的集落に位置づけられる鳥井南遺跡が所在し、標高95～85mの狼段原地区では谷筋で大溝が確認されている（大田市教育委員会2018）。狼段原地区の中心時期は弥生時代中期後半～後期で、弥生時代は遺跡の南東部に中心があったことが示されている。弥生時代前期後葉～後期中葉の尾ノ上遺跡の大溝は、鳥井丘陵に展開する遺跡の変遷と性格を考察する際、丘陵東南端部の様相をうかがう遺構として重要な位置を占めるものと考える。

今後は山陰沿岸部における大溝（環濠）の歴史的位置付けに対しても、考察を進める必要があろう。

2. 箱式石棺墓

箱式石棺墓は大溝の埋没後にできた旧地形を基盤として築造されたものであるが、側石の一部を残して破壊され、墳丘の形態も把握できなかった。築造時期については層位的な検証から弥生時

代後期後葉以前が可能性として考えられるものの、出土遺物がないことから特定できていない。

また、隣接して検出された弥生時代後期後葉の土坑（SK01・02）は、SK01に含まれていた礫に被熱痕が認められることや石棺墓と共に通する石材がみられることなどから、石棺墓との関連性が示された。いずれの遺構も大溝の南側肩部に沿うように位置していることは、丘陵端部に位置するこの谷地形を意識した配置と考えられる。以上から、石棺墓の時期を大溝の埋没した後から2基の土坑が埋まるまでの、弥生時代後期後半と想定することも可能であろう。築造時期については断定できない現状であるが、周辺地域における弥生時代の箱式石棺をもつ墳丘墓は限られ、石見地域では邑南町に所在する順庵原1号墓があげられる⁽¹⁾。確認された埋葬施設のうち、第1と第2主体部に箱式石棺が設けられており、時期は弥生時代後期前葉～中葉とされている⁽²⁾。尾ノ上遺跡の石棺墓の時期を可能性のひとつとしてあげた弥生時代後期後半とした場合、順庵原1号墓に次ぐ最も古い時期に比定される可能性があり、石見地域および県下の墳墓研究に一石を投じる資料として注目されよう。

上述したように、尾ノ上遺跡が立地するこの鳥井丘陵の山腹から頂部には、大規模な集落跡が検出された鳥井南遺跡や御堂谷遺跡が存在する。鳥井南遺跡では3基の古墳が確認され、このうち1号墳と2号墳は古墳時代後期とされている。尾ノ上遺跡は鳥井南遺跡や御堂谷遺跡で営まれた集落の盛行時期と重なる部分があり、尾ノ上遺跡の石棺墓は丘陵東南端部における墓制のありようを示す一例として評価される⁽³⁾。また、この丘陵全体を舞台として展開したこれらの遺跡を一つの集合体と捉えた場合⁽⁴⁾、その実態を検討するうえで貴重な資料となるものである。

第2節 桜田遺跡

1号穴については、出土遺物から時期が特定できず、横穴墓以外の性格を示す要素の多いものであったが、後世に横穴墓が改変され二次利用された可能性が高いものと考える。今回の調査で1基のみの検出にとどまることは、調査区の広範囲に及ぶ石切場によって他の横穴が消滅した結果と推測され、本来は複数の横穴墓が存在したものと思われる。

なお、大西大師山遺跡など、凝灰岩を切り出す石切場の近くで横穴が確認される例は少なからずみられるため、その取り扱いには注意を要しよう（島根県2016）。

1区で検出した石切場は、凝灰岩を石材として切り出した小規模な採掘跡である。採掘にあたっては「溝切技法」が行われている。この技法は福光石、温泉津地区、大田市朝山地区だけでなく、出雲市大井谷や安来市荒島の凝灰岩、松江市宍道町の来待石でも採用されており、この地域の一般的な技法である⁽⁵⁾。需要があれば、使用可能な石材の岩盤を探し採掘し、切り出す石質がなくなれば次に移っていると考えられる。採掘規模、採掘技法、工具痕等から近世以降と考えられる。

大田市周辺では大田市久手町大西大師山遺跡（島根県2016）、大田市波根町松田谷横穴墓群（大田市1982）、同町東灘遺跡（大田市2005）、大田市温泉津町梨ノ木坂遺跡（島根県2010）、同町大迫ツリ遺跡（島根県2014）、同町小釜野遺跡（島根県2014）で石切場の発掘調査が行われている。発掘調査以外にも、大田市大森町の伝統的建造物群や石見銀山遺跡、沖泊、久利町赤波、長久町稻用、温泉津町福光等でも石切場が確認されている（中村・西尾2017）。温泉津町の伝統的建造物群の建物の裏側（山側）は岩盤を大きく掘削し、敷地を確保している。街道や家屋等の整備に切石が使用

され、その石材を調達した石切場が多数残っている。

今回の桜田遺跡の石切場もそのような採石場の1つと考えられ、当地域の石切場等の様相を知ることができ、「溝切技法」が採用される地域との関連性も注目される。この地域における石材加工産業やその技術の歴史的変遷を検討するうえで貴重な成果である。桜田遺跡で切り出された石材の使用法については具体的な事例を示せていないが、周辺の調査も含め今後の課題としたい。

【註】

- (1) この他に、未報告であるが、邑南町輪之内遺跡において、弥生時代後期後葉に比定される墳墓で箱式石棺が2基確認されている。日本考古学協会 2014 東山信治「各県の動向 32 島根県」『日本考古学年報 65(2012年度版)』
- (2) 順庵原1号墓は、第1主体部が長さ2.2～2.4m、幅1.5～1.65m、深さ0.75～0.8m、第2主体部が長さ2.49～2.58m、幅1.31～1.54m、深さ0.48mの規模となっている。対して尾ノ上遺跡の石棺墓の規模は、長さ2.5m、幅0.85～1.15m、深さ0.18～0.21mである。島根県教育委員会 2007『順庵原1号墓の研究』
- (3) 順庵原1号墓は集落に隣接する河岸段丘上の段丘端に位置しており、御堂谷遺跡と繋がる丘陵端部に造られた尾ノ上遺跡の石棺墓とは築造場所の選定にあたって何らかの共通性をみることができよう。
- (4) 島井丘陵に立地する遺跡には、時期や性格などの差異があるものの、丘陵全体への遺跡の広がりが指摘されている。大田市教育委員会 2018『島井南遺跡発掘調査報告書I－宍貫田地区・志田ヶ池地区・蠍山地区・千代迫地区・狼段原地区－』
- (5) 烏谷芳雄氏の御教示による

【参考文献】

- 中村唯史・西尾克己 2017「石見銀山遺跡で使われた石材」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要7』
- 大田市教育委員会 1982『大田市松田谷横穴群』
- 大田市教育委員会 2005『東灘遺跡』
- 大田市教育委員会 2018『島井南遺跡発掘調査報告書I－宍貫田地区・志田ヶ池地区・蠍山地区・千代迫地区・狼段原地区－』
- 大田市教育委員会 2018『島井南遺跡発掘調査報告書II－狼段原地区－』
- 松江市教育委員会 2005『田和山遺跡』
- 松江市教育委員会 2010『佐太前遺跡発掘調査報告書』
- 安来市教育委員会 2006『経塚鼻遺跡』
- 会見町教育委員会 1975『諸木遺跡発掘調査概報』
- 会見町教育委員会 1993『天王原遺跡発掘調査報告書』
- 会見町教育委員会 1982『宮尾遺跡 天万遺跡 発掘調査報告書』
- 西伯町教育委員会 1992『清水谷遺跡』西伯町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 財団法人鳥取県教育文化財团 2001『大塚岩田遺跡大塚塚根遺跡』
- 島根県教育委員会 2007『順庵原1号墓の研究』
- 島根県教育委員会 2007『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』
- 島根県教育委員会 2010『梨ノ木坂遺跡 廟寺古墳群 廟寺遺跡II』
- 島根県教育委員会 2013『西川津遺跡古屋敷II遺跡』
- 島根県教育委員会 2014『廻寺古墳群II 大迫ツリ遺跡 小釜野遺跡』
- 島根県教育委員会 2016『大西大師山遺跡』
- 島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡 諸友大師山横穴IV群1号穴』

写真図版



1. 尾ノ上遺跡（手前）と御堂谷遺跡（奥） 空撮（東から）



2. 尾ノ上遺跡 調査区全景 空撮（東から）

図版 2



1. 尾ノ上遺跡 調査前風景全景（南から）



2. 尾ノ上遺跡 A区 全景（南東から）



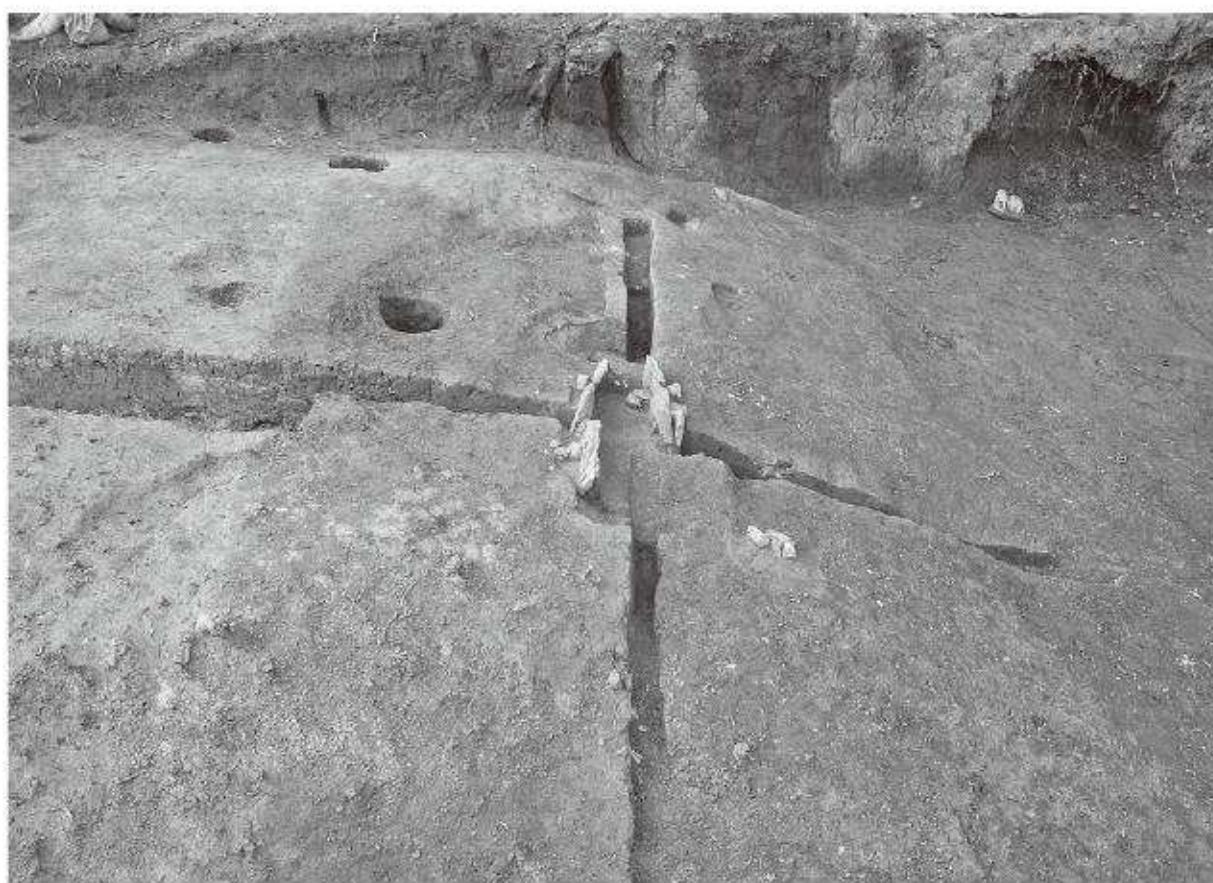
1. 尾ノ上遺跡 A 区 箱式石棺位置（南東から）



2. 尾ノ上遺跡 A 区 箱式石棺小口（西から）



1. 尾ノ上遺跡 A 区 箱式石棺内部



2. 尾ノ上遺跡 A 区 箱式石棺と SK02 検出状況（東から）

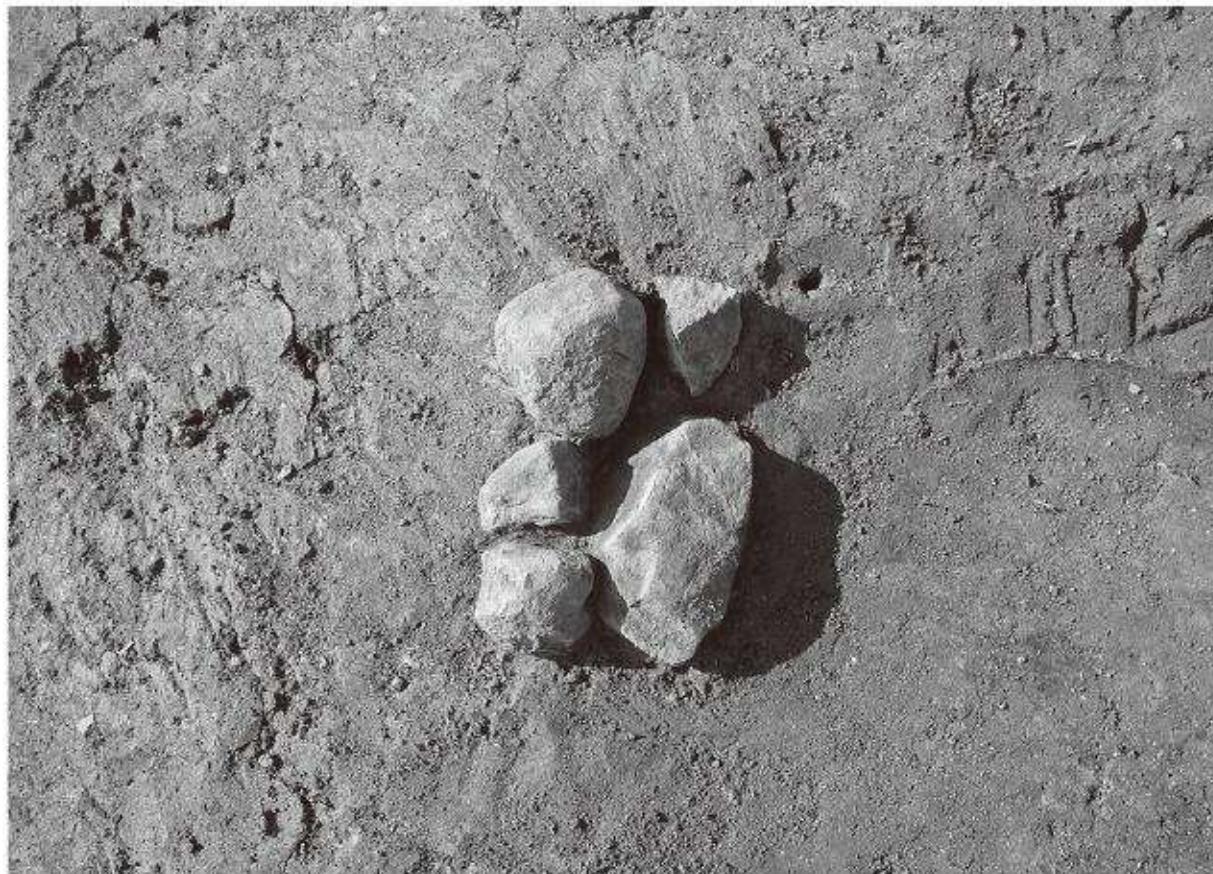


1. 尾ノ上遺跡 A 区 箱式石棺と SK02 検出状況（南から）



2. 尾ノ上遺跡 A 区 SK01 検出状況

図版 6



1. 尾ノ上遺跡 A区 SK02 検出状況



2. 尾ノ上遺跡 B区 全景 (北西から)



1. 尾ノ上遺跡 B区 大溝内石検出状況（東から）



2. 尾ノ上遺跡 B区 大溝掘削状況（西から）

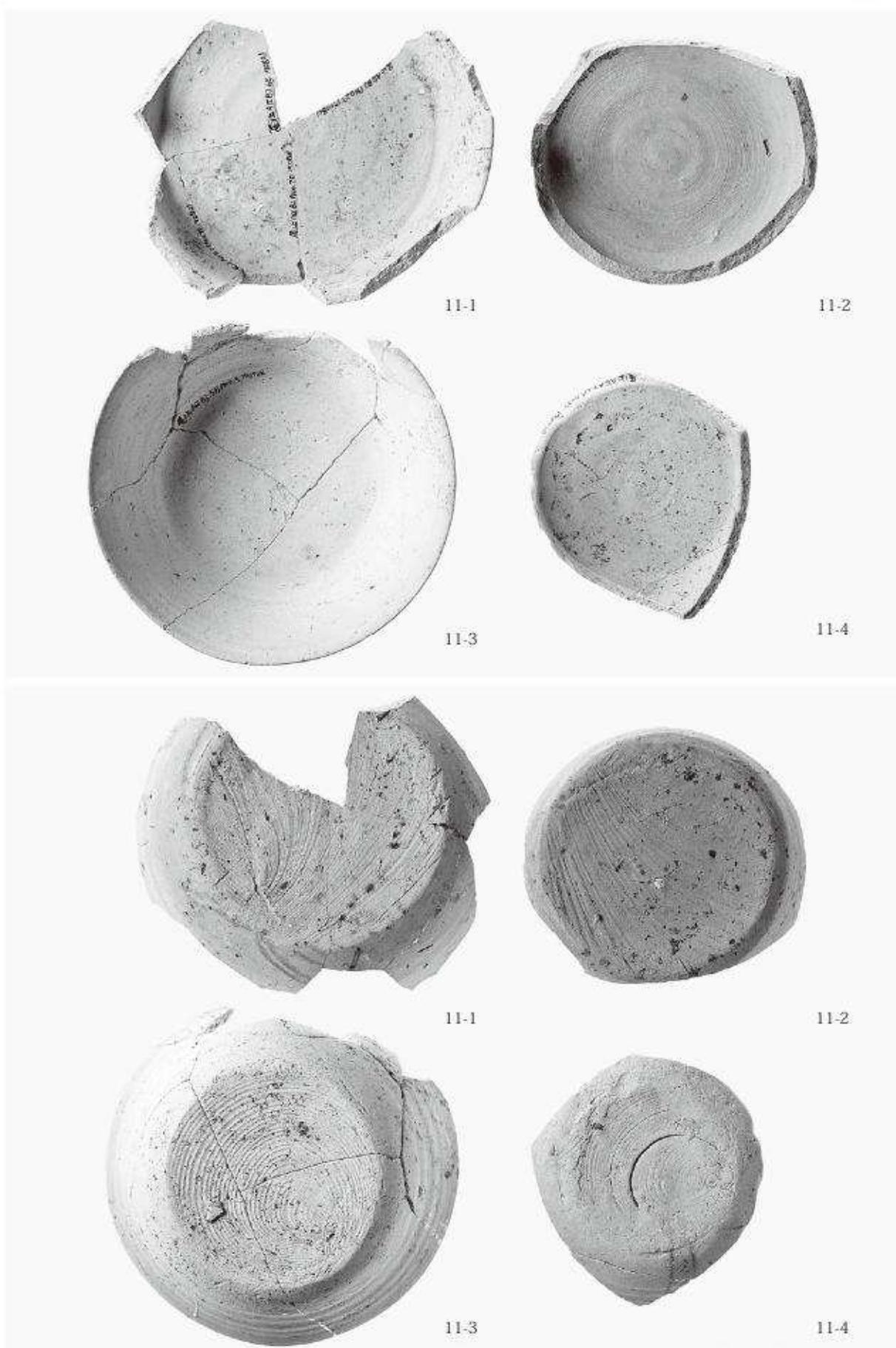
図版 8



1. 尾ノ上遺跡 B 区 大溝掘削状況（南から）

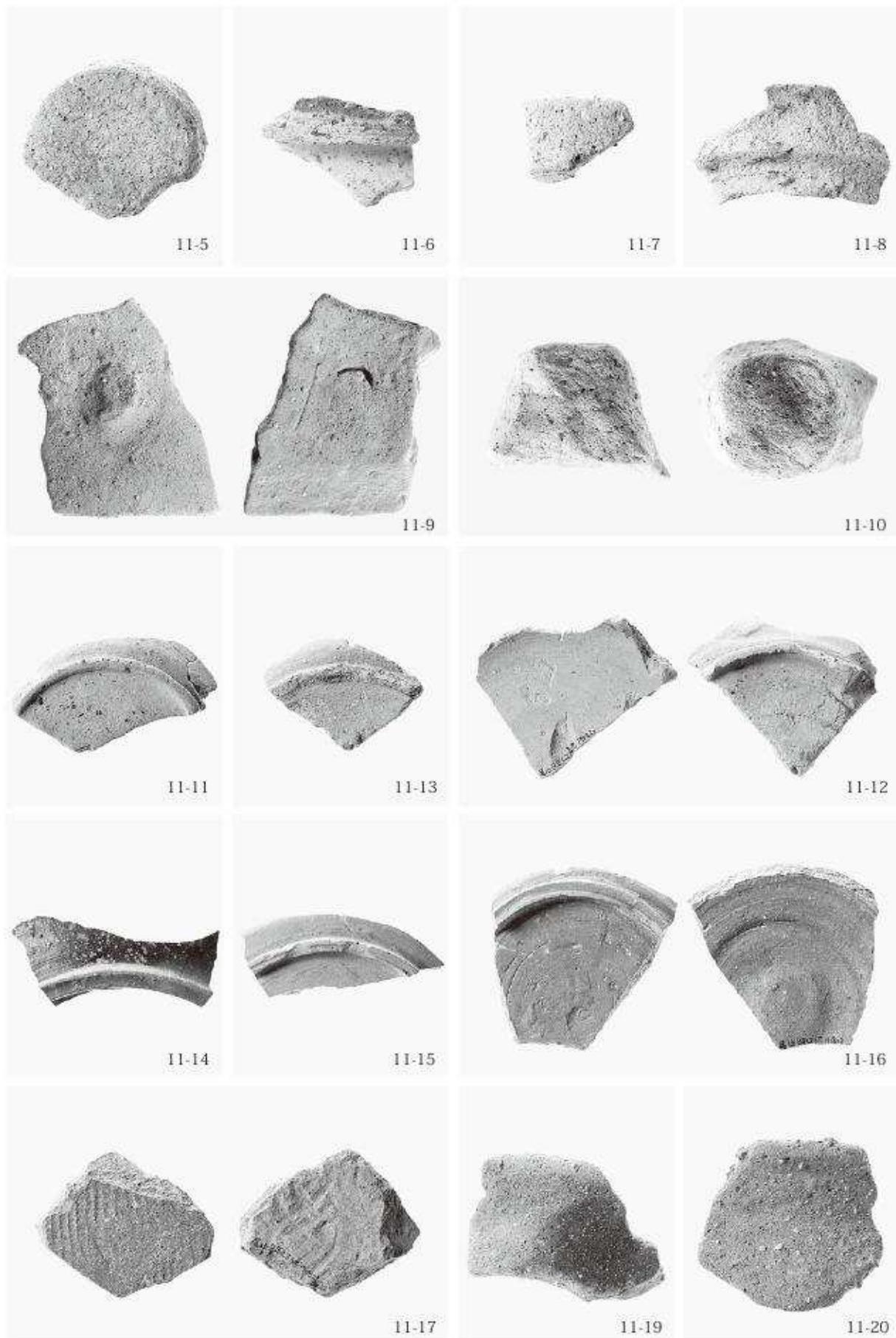


2. 尾ノ上遺跡 B 区 大溝土層堆積状況（西から）



尾ノ上遺跡 包含層出土遺物（1）

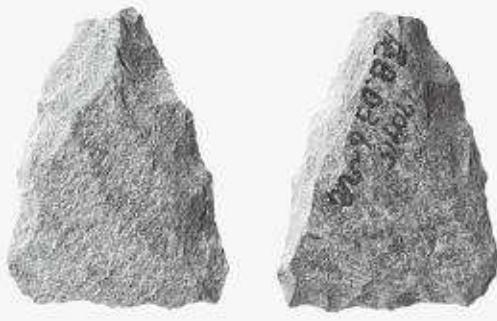
図版 10



尾ノ上遺跡 包含層出土遺物（2）



11-18



11-22



11-21

尾ノ上遺跡 包含層出土遺物（3）



10-1



10-2

尾ノ上遺跡 SK01 出土遺物



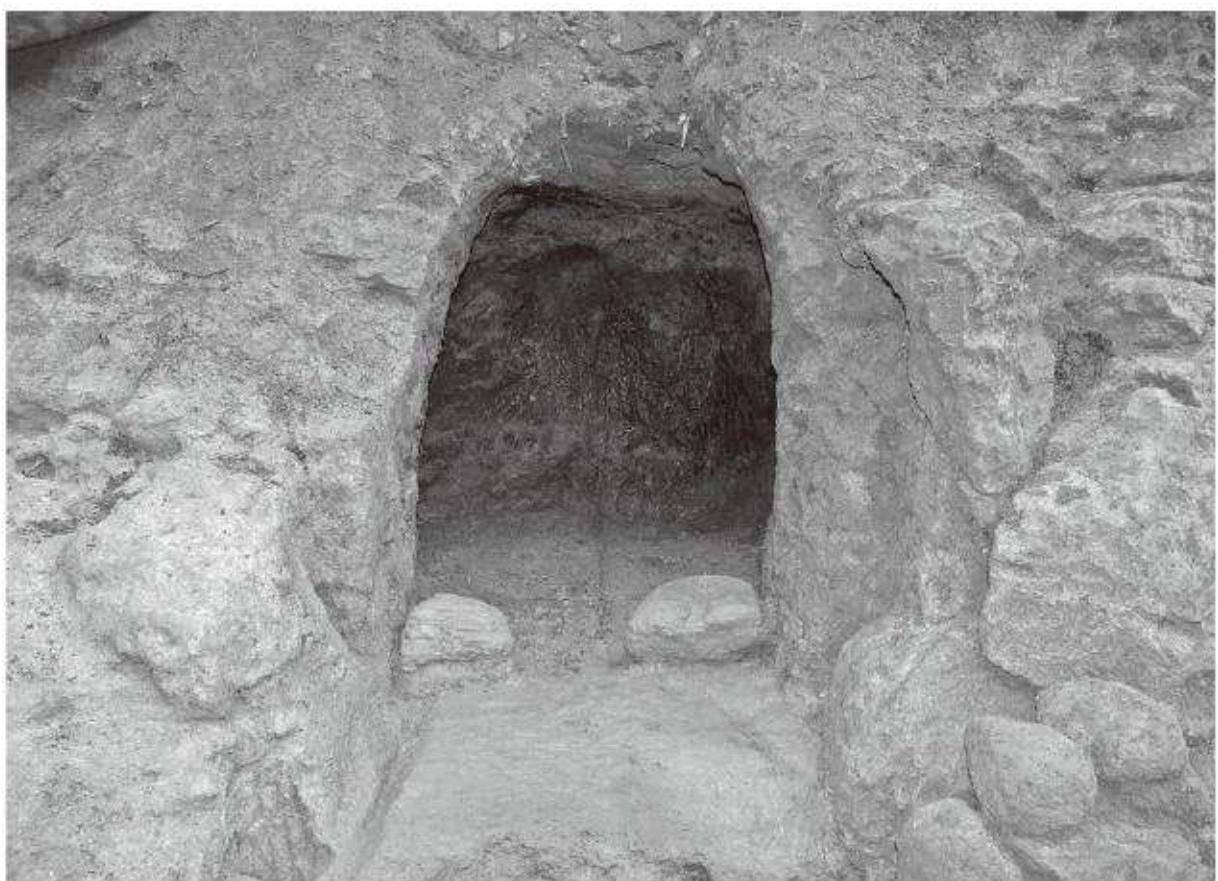
1. 桜田遺跡 1区 調査前（北東から）



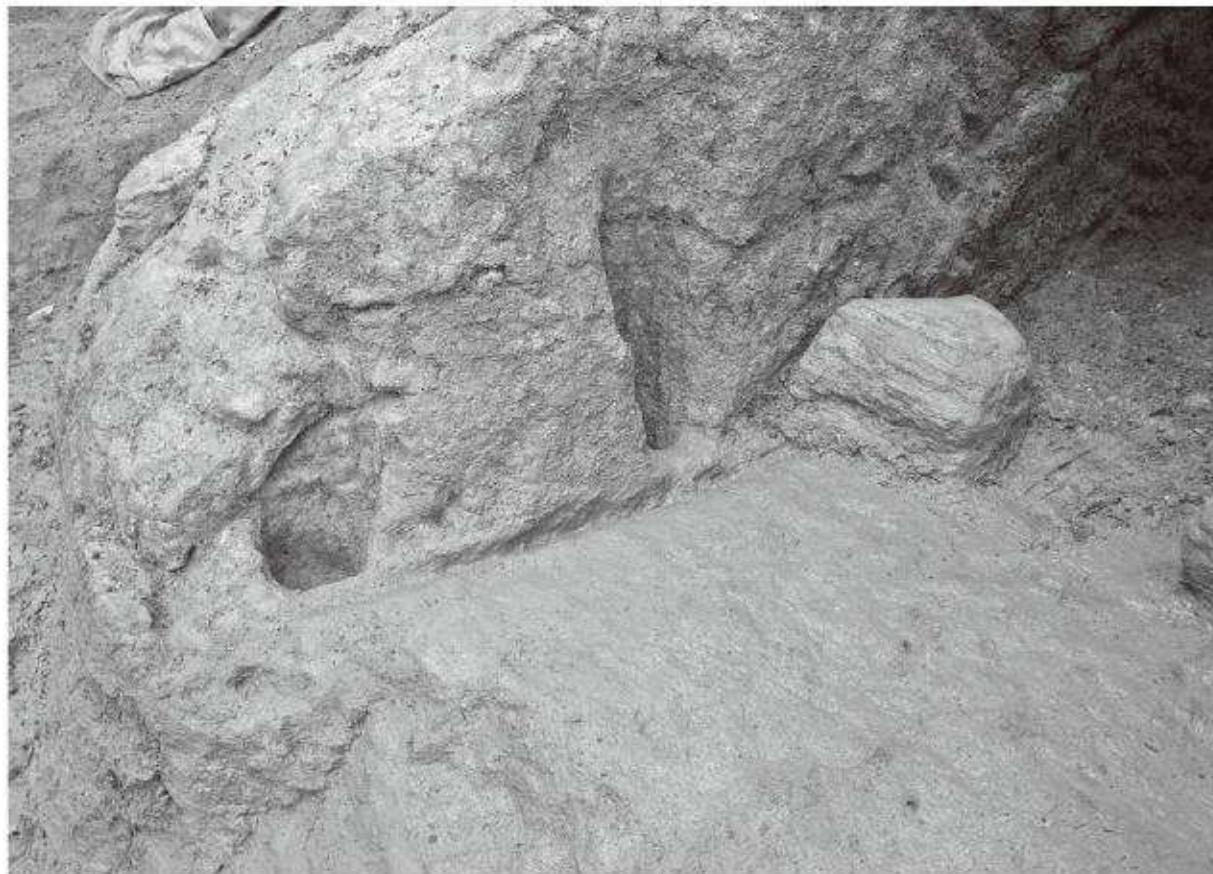
2. 桜田遺跡 1区 完掘状況 空撮



1. 桜田遺跡 1区 石切場と1号穴（東から）



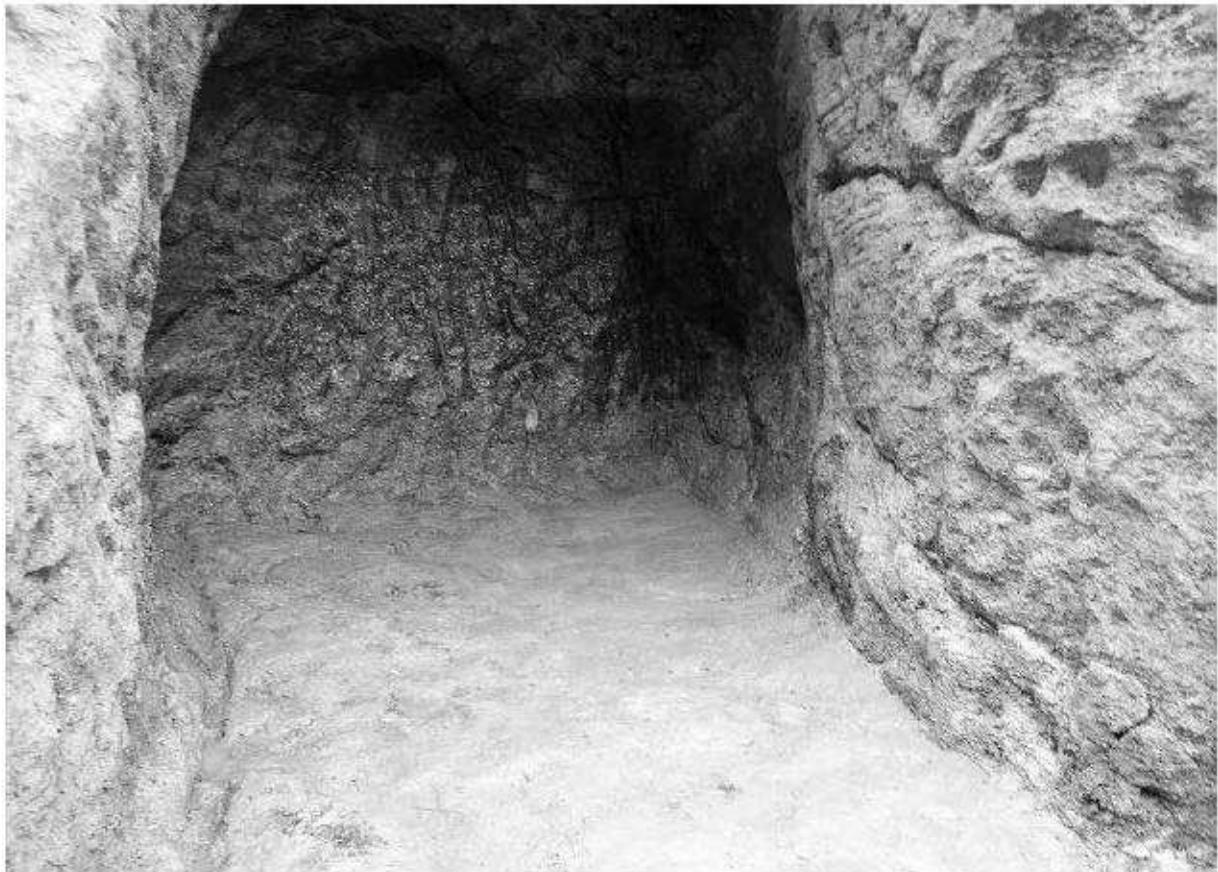
2. 桜田遺跡 1区 1号穴（東から）



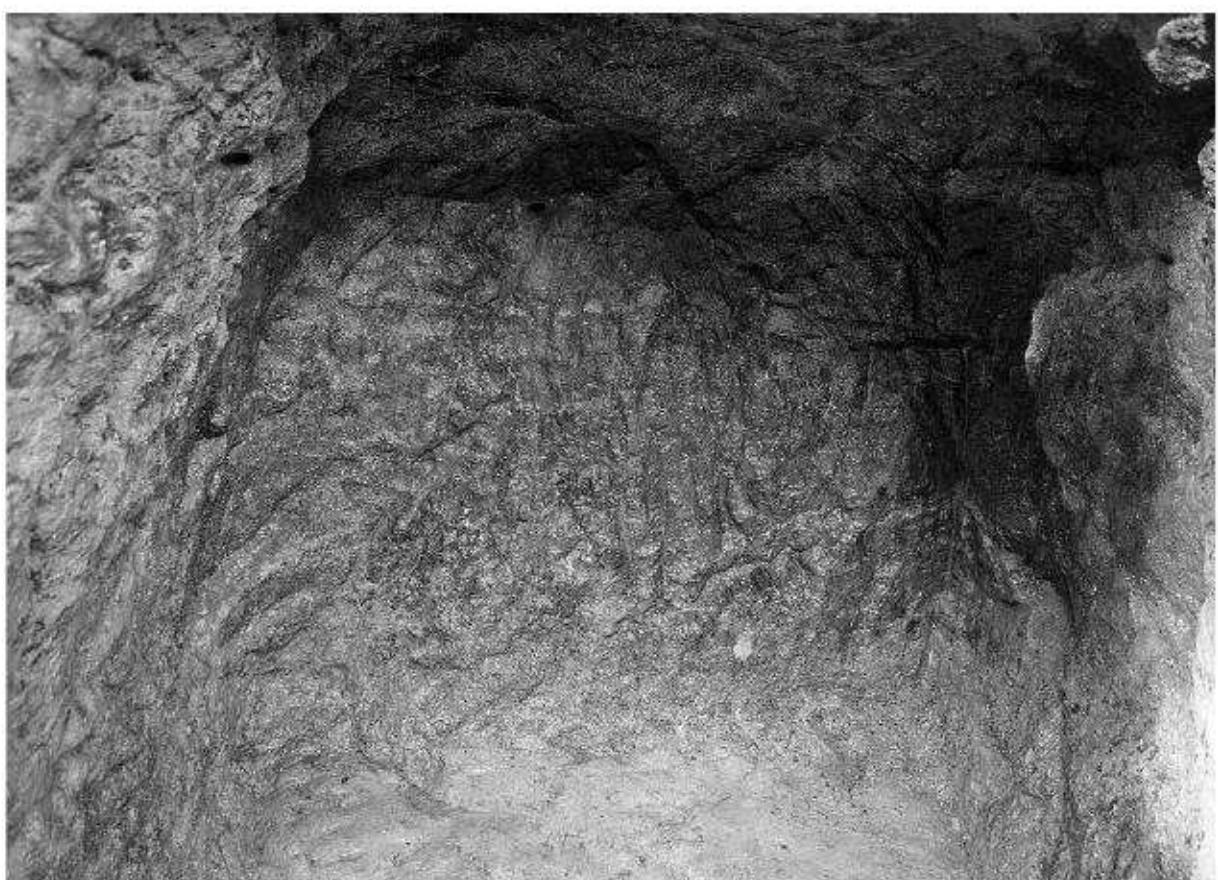
1. 桜田遺跡 1区 1号穴前庭部



2. 桜田遺跡 1区 1号穴（東から）



1. 桜田遺跡 1区 1号穴（玄門部から奥）



2. 桜田遺跡 1区 1号穴（内部）



1. 桜田遺跡 1区 1号穴加工痕（向かって左側壁）



2. 桜田遺跡 1区 石切場（1号穴より北側東から）



1. 桜田遺跡 1区 石切場南寄り（東から）



2. 桜田遺跡 1区 石切場中央部（東から）



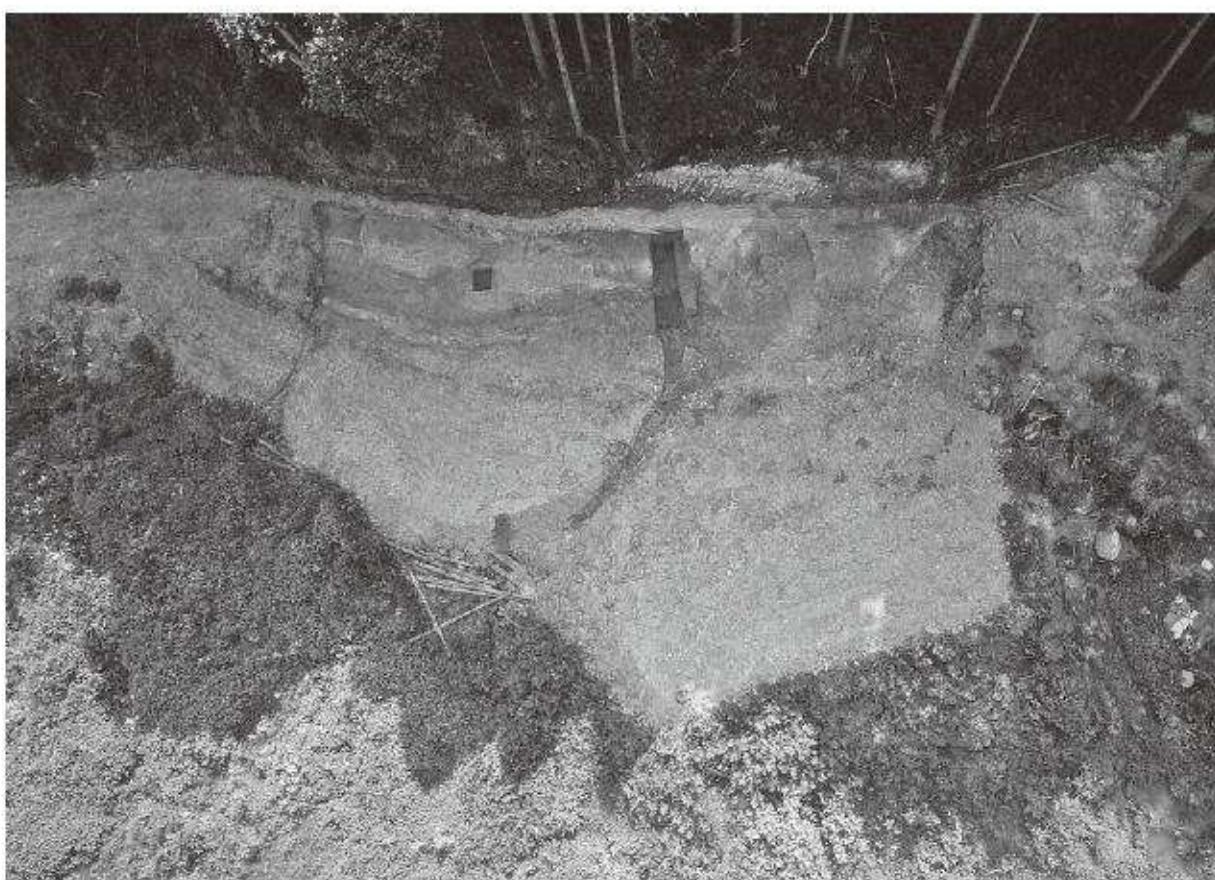
1. 桜田遺跡 1区 石切場部分（東から）



2. 桜田遺跡 1区 石切場南半分全景（北東から）



1. 桜田遺跡 2区 全景 空撮 (南から日本海を望む)



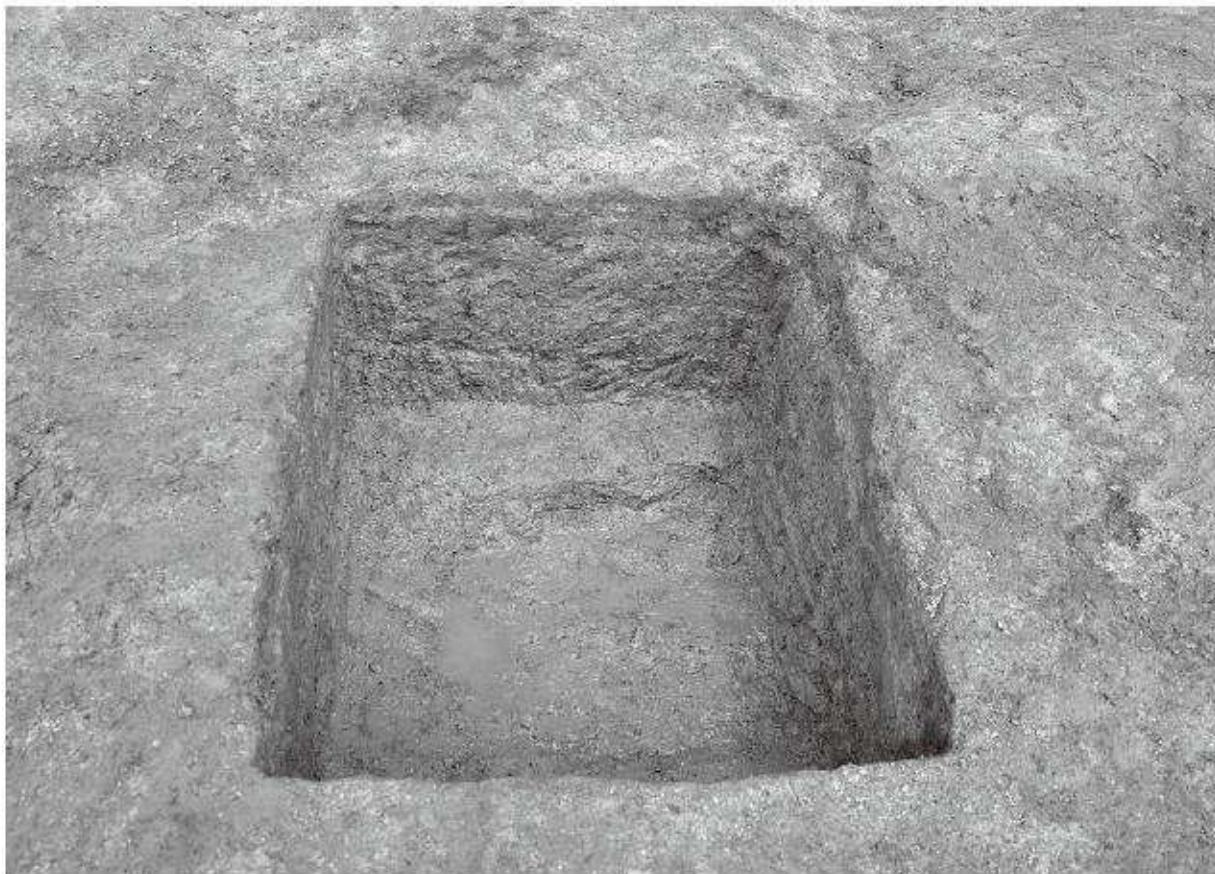
2. 桜田遺跡 2区 完掘状況 空撮



1. 桜田遺跡 2区 完掘状況（西から）



2. 桜田遺跡 2区 完掘状況（北から）



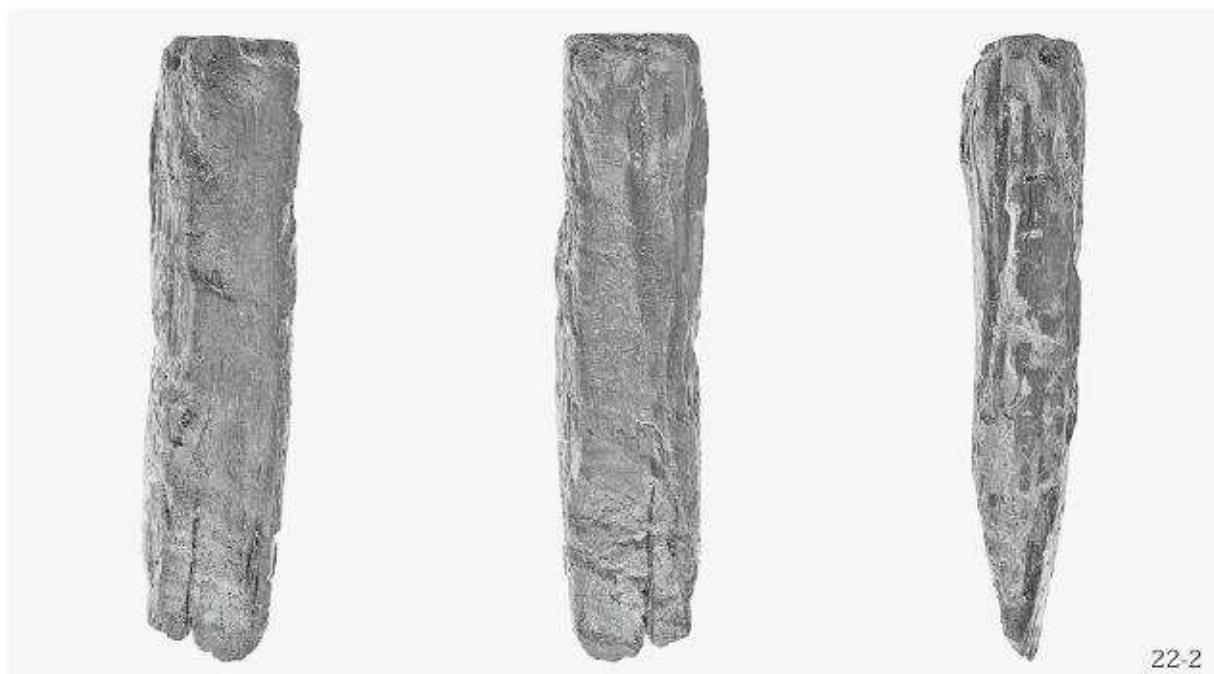
1. 桜田遺跡 2区 SK01 完掘状況（西から）



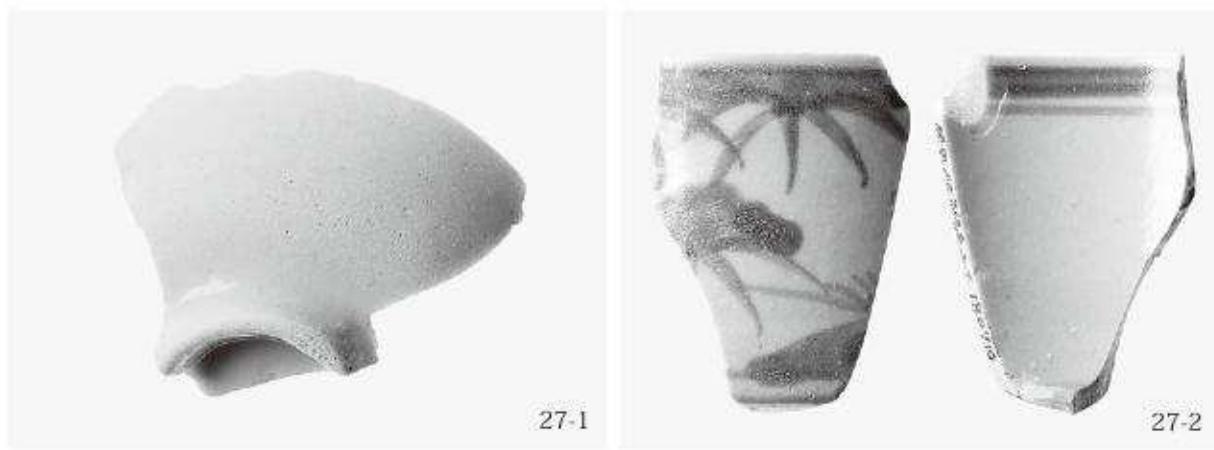
2. 桜田遺跡 2区 SK02 完掘状況（西から）



22-1



22-2



27-1

27-2

桜田遺跡 出土遺物

印刷仕様

紙 質 表 紙 レザック四六判 175.0kg
本 文 上質紙A判 57.5kg
写真図版 上質コート紙A判 70.5kg
D T P Windows 10 Pro
Adobe InDesignCC 2019 PhotoShop CC 2019
Illustrator CC2019
画像原稿 階調画像線数 175 線 (AM スクリーン)

尾ノ上遺跡

桜田遺跡

一般国道9号（大田静間道路）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書4

発 行 2019（令和元）年 12月

発行者 国土交通省松江国道事務所

島根県教育委員会

編 集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地

電話 0852-36-8608

印 刷 武永印刷 株式会社